

音
詰
稻
妻
表
紙

全



東山八景

見とたせのひかちやまのはるの氣しきやまきとむはやしにふくみらしの
山市の晴嵐とうたかはれ河原おもてのまさこのいろは江天の暮雲もが
くやらむねもしろ花のまやこやちゆのさくらよきくいなむ賀茂川
のなかれのすゑにゆくふねハ遠浦の歸帆かさへわたる清水寺のかねの
こゑ煙寺の晚鐘のひ、きそれえら川のすささばつたさの散亂すハ平沙
の落鴈ともいひつへいさてれうせむの月かけハ洞庭のあきの、これに
ハよもまさらしさてまた漁村の夕照ハつりたれておきまきにあ所ふも
のと

香つくくし

六十一種の名香ハ法隆寺東大寺逍遙みよしの紅塵枯木をか川法華經は

田光池上温泉

賀茂川

なたちばなやつはし園城寺似たり不二のげむりのあやめ榮若鷓鴣班あ
 を梅楊貴妃とび梅たねがしまみをつくらし月籠田もみちの賀斜月白梅千
 鳥や法華老梅八重かき花の宴はなの雪名月賀蘭子卓橋ばを散里丹霞え
 なかたみかをり須磨わかし十五夜隣家夕時雨たまくら有明雲井くれな
 りはつせ寒梅ふた葉早梅霜夜たかはたねさめ志の、めうすくれをるう
 すくものほり馬とかく伽羅のけふりといのちの君のとめてもいく夜い
 くよとめてもとめわかぬ

右東山の景香盡二曲のむかし室町に花の御所をいとなまれし頃京
 童のうたひし小歌とをむその、ちをるか過て堺の僧高三隆達とい
 ふ者ふしはかせをあらためかへてうたひしよりなへて隆達ふしと
 いふとを此草紙の時代に因あるをもてこゝにゑるとつ

不破伴左工門

稲妻の

そとしまろ

見ふり

不破の関

荷翠

名古屋山三

傘

孫

かたふし

怒れ燕



其角

骨道風僊



咲^{さき}白^{しろ}梅^{うめ}の
川^{かみ}の花^{はな}ざう

鏡^{かがみ}の

かみ

かみ

為家卿

○梅津嘉門

傾^{かたむ}城^{しろ}

賢^{けん}ふる

あは

柳^{やなぎ}うら

其角



ゆき

胚 奸 逞 慾

○ 不破道犬 伴左門父

何れ聲 こゝろ

石場 いしや

くらひ くらひ

時鳥 ときどり

其角 そのかく



回 雪 飛 僊

○ 白拍子藤波幽魂

骸骨の 鬼貫 おぼろ

くらひ くらひ

粧 まげ

花見哉 はなみ

食物 たべもの

水 みづ

魂糸 たまご

嵐雪 あらしゆき



皮 蛭 足 畫

蛭へびと

まげを

あまの

姫き子こ

此こゝ声こゝろ

芭 蕉



○丹波國因果娘えびのふりんぎむすめ

○六字南無右衛門むすむすむすむすむすむす

薄 陰 寒 水



あまの

細看こまちりよ

大井川

宗因

天機心匠

○浮世又平重起



大津繪乃

筆のえりか

何佛

芭蕉

守節握符

○貞婦磯菜

花瓜や

絵紙

かしらめり

琵琶上

言水



夜動晝藏

○銀杏前

うらぶ花

まゆ

嵐ちりゆ

潤乃

其角



裂石穿雲

○佐々木桂之助國知

七月

暮露

うべ

入

笛を聞

其角

○又平妹於竜



幡 非 風 非

水風の下の
素山子け
糸の怪



○ ちりんの
舊家怪



佐々木桂之介
お山三之介
シテ草履ヲ
モッ伴左門
ヲ打シム



佐々木三郎
忠義ノ為
麻波ノ殺ス



南無石門
木津川ノ渡
先女ノ危難ヲ



種之み故 伏無
魁ノ行跡アル
ニヨリ 勘當スヘ
キヨシ内意アリ
不破道犬
上京シテ
其事ヲ
ルツタヘ

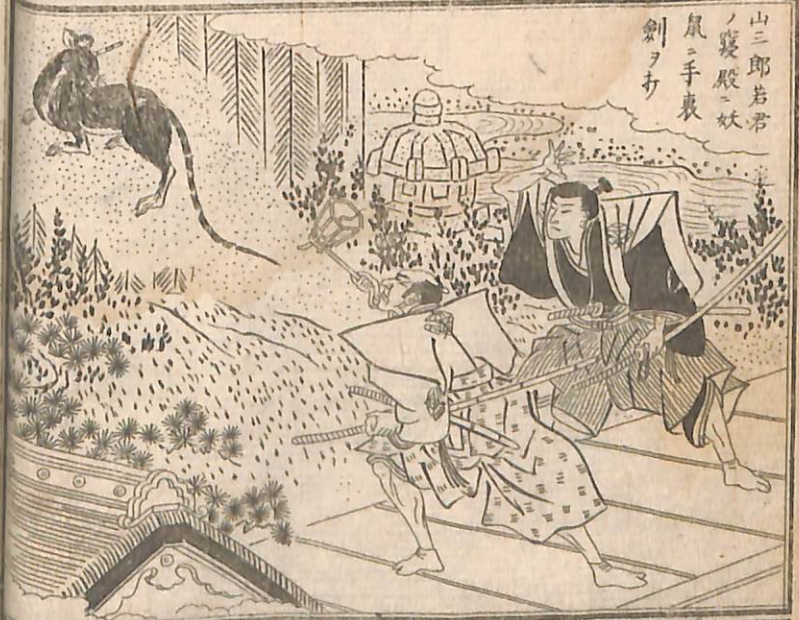


麻波ノ筋渡
小地トシテ
楓ノ腹ニイ
トヒツ



梅津喜門
華屋ヲ見テ
治乱安七
ヲ論
ス

山三郎若君
ノ寝殿ニ妖
鼠ニ手裏
劍ヲカ



名古屋山三郎
銀杏前ノ杖ヲ
館ヲ落キタリ
姫ヲ追テニウ
バニ腹ヲ
ミラン
ト入



不經道天如
ノ方ト計リテ
杏ノ前月甚
浮ノ鏡ス

南無聖門
月若ヲカ
クマイラク



因果娘



近江國
石山寺
観音閣
群集ス



南無右三門
忍リニクエス
一子文殊ヲ
手抄ニス



比叡
赤湯の
丸舟寺
実八名古
屋山三ヶ下
部種二郎佐
々木柱之女の
危難ヲスウ

菩薩建立



いづの
前と云
念合ニ
於し自を
うたんとす
時たりそり
かころす



梅津右門金剛山ニ
世ヲ避テ生涯之無
事ヲ願フ



南無右門
修行者ニ
身ヲ捨シテ
天津又平
カ家ニ



京五條坂之
曲中ニ於テ
勸管位講
之因



楓孝道
厚キニヨリ
夢中名画
ノ奇特ヲ
得テ妖地
ノ難義ヲ

藤波
成仏ス

小幡之里二
山三郎
貧家、
光景



山三郎五
條坂ノ堤
安富ノ内
ニカクテ
伴左工門
等ヲ持
ウケル



五條坂ノ堤二
於テ山三郎
復讐五人ヲ
斬ル



山三郎不破
伴左工門ヲ
斬ラ父ノ仇
ヲムクウ





梅津 善門善
 忠臣ヲ
 シテ
 明ヲ
 礼ヲ
 正シ
 積悪ノ
 徒ヲ
 討ス

昔話稻妻表紙卷之壹

○ 遺恨の草履

江戸

山東京傳編



五條坂神林ノ主人
 名古屋山三郎カ飯茶
 テ祝レテアマタノ舞
 妓ヲ、ク九山三郎銀
 子衣服ヲ神林上婦
 并舞子共ニアラ

今は昔人皇百三代後花園院の御宇長祿年中足利義政公の時代雲州尼子の一族に大和の國を領す佐々木判官貞國といふ人ありけり兄弟二人の男子をもてり兄は桂之助國知といひて今年二十五歳あり弟は花形丸とて十二歳あり兄は先妻の子弟は後妻御手の方といふに出生したる子あり桂之助の伯父は藏人貞親といふ人あり是則判官貞國の弟あるゆゑ一乃町の分地と與へ同國平郡に別館と造りそへかきけるが一人の娘とまうけ先づつて夫婦とも身まうりけりその息女容顏美麗あるが成長の後桂之助の内室とかり名を銀杏の前といふ夫婦中ひつましくはどかく男子誕生あり其名と月若といひて今年七歳にぞかりぬ其頃義政公京都室町に新館と營て花の御所と號し兼て花車風流を好み玉ひ近仕のしも列候の子息のうちより美男を撰びて召つうはれけるが桂之助兼て美男のさこえあるより此美男入て京都よめされ右近の馬場の旅館に住室町の御所を通ひて勤けり此度桂之助もあふびて上京し

さる家士の執權不破道犬が一子不破伴左衛門重勝長谷部雲六笹野蟹藏葉屑三平土子泥助犬
上雁八等あり去程み桂之助妻子の國も殘しかき其身獨長々在京し御所勤の氣鬱つもありける
みや頃日の病がちよなりて折々惱みければ一時家士等桂之助が前も集何があ殿の鬱結と慰
むる事もやと評議しけりさて當家の重實の巨勢金岡が書さる百蟹の圖とて百種の蟹をかき
さる繪巻物あり室町殿兼て古書書を奴み玉ふより御聞よ達し御覽あるべきよし命せられ
ければ國元より名古屋三郎左衛門が一子名古屋山三郎元春彼巻物を携へてまかり上りそあ
はち當館よ逗留してありたるが兼て大願申樂と好れけるゆゑ山三郎武藝のいとま亂舞と學
びて厚どりて名譽の者ありければ皆々口を揃へてすける山三郎上京こそ幸ひかれかれに
一さし舞せては覽いへうし彼が舞御國元よての度々は覽ありし事あれば相人あくての興あ
るまじ頃日時めく白拍子よ藤波とすそ女あり年の十七歳のよし歌舞吹彈の業よ達しまうも
類まれある美女にて古の祇王祇女佛さどももあさくどらざる者よては彼と召て山三が
相人とし亂舞俳優と催しあらばいみじき觀物よてははんと伴左衛門とはじめこれとそよめ
といひて退きつぐる日彼藤浪ならびは職方と召よせ山三郎をくはへて亂舞俳優とさせ美々

しく酒宴をまうけて大い興と催しけりかくて山三郎藤浪はるく種々の舞ありて後酒酌
の亂足西寺の風舞無力舞無骨蚯蚓の道行より福廣聖の袈裟求妙驛尼の襦袢乞などいふ南
人立合の俳優ありて笑ひと生じ終りよいたりて藤浪男舞といふ秘事を舞ひこれの昔徳島村
院の御宇道憲入道讀岐の磯の前司といふ女も傳へたる舞なり金の立鳥帽子白水干紅の大
口はき太刀とあびて立舞さす誠是沈魚落雁羞月閉花の容ありひるがへそ袖の蟹風の舞よ
ひとしく歌うさふ聲の頻伽の囀るが如くされば皆人感またへ奇妙の舞絃やと賞嘆しむらく
みやまざりけり此時より桂之助藤浪と戀をめて病にいづくへり去只思ひ川の水胸よむふれ
て戀の淵となり舞を見に事よせて度々めしよせけるがつひは伴左衛門がはくらひとして藤
浪と桂之助の妻よめしかへ館よ引とりて給仕させければ桂之助望たりて最愛深く召つか
ひかれが妹よ於龍とて今年十三才よある少女のありけるとこれをも館よめしよせて藤浪が
るバづかひよさせぬ藤浪も桂之助が美男なるよめで、誠心を盡し蟹蟹の契渡りらざりしか
ば桂之助かのづから御所の勤仕あるそよまありぬされども後臣等のこれを幸とし晝夜うた

はらとは奇れず遊相人となりて酒宴嬉樂のみありしくらせバ旨酒珍膳席上まみち野曲

歌室中にかまびそく恰も妓家娼門の所行よししてうたてかりける形勢なり山三郎逗留の間此

爲体と見聞して只獨胸をいため安き心のせざりけりしかるも伴左衛門いつのはどよりう

浪又懸葦し千束の艶書をおくるといへども藤浪の手もふれを盡くこれをもとして一言の

返答ぶよせを伴左衛門一向思ひといまら老折とうりひひまよ見ておどしつそりじつりさ

くどく藤波はじめの彼が恨憤らん事をおそれて心一ツよおさめおきけるが今いやむこと

を得走桂之助も艶書と見せて彼がふるまひをつぶさよ告ぬ桂之助の短氣の生れなるうへに

心狂はしくなりさる時なればこれを聞とひとしく憤然として怒氣天よさうのぼり急き伴左

衛門をめし出しかの艶書とくりひろげていひけるの汝藤浪よ不義といひかけ敷通の艶書と

おくる條罪科甚重し後日の見せしめよ我みづから手とくごそなりといひもあへせ白粉巻

と扱はなしけれバ次の間よひかへたる山三郎いそがはしく走出袖そがりて押とやめ詞を

盡してなごめけるまぞやうく刀をおさめえうるうへに汝めめで一命とたそけ長く勘當

衛門の一言の分説なく只打去はれてぞ伏居り桂之助山三郎と願み汝上臈履と以て伴左

衛門の一言の分説なく只打去はれてぞ伏居り桂之助山三郎と願み汝上臈履と以て伴左

衛門の一言の分説なく只打去はれてぞ伏居り桂之助山三郎と願み汝上臈履と以て伴左

衛門の一言の分説なく只打去はれてぞ伏居り桂之助山三郎と願み汝上臈履と以て伴左

衛門の一言の分説なく只打去はれてぞ伏居り桂之助山三郎と願み汝上臈履と以て伴左

衛門の一言の分説なく只打去はれてぞ伏居り桂之助山三郎と願み汝上臈履と以て伴左

衛門の一言の分説なく只打去はれてぞ伏居り桂之助山三郎と願み汝上臈履と以て伴左

衛門の一言の分説なく只打去はれてぞ伏居り桂之助山三郎と願み汝上臈履と以て伴左

衛門の一言の分説なく只打去はれてぞ伏居り桂之助山三郎と願み汝上臈履と以て伴左

衛門の一言の分説なく只打去はれてぞ伏居り桂之助山三郎と願み汝上臈履と以て伴左

衛門の一言の分説なく只打去はれてぞ伏居り桂之助山三郎と願み汝上臈履と以て伴左

衛門の一言の分説なく只打去はれてぞ伏居り桂之助山三郎と願み汝上臈履と以て伴左

衛門の一言の分説なく只打去はれてぞ伏居り桂之助山三郎と願み汝上臈履と以て伴左

衛門の一言の分説なく只打去はれてぞ伏居り桂之助山三郎と願み汝上臈履と以て伴左

衛門の一言の分説なく只打去はれてぞ伏居り桂之助山三郎と願み汝上臈履と以て伴左

衛門の一言の分説なく只打去はれてぞ伏居り桂之助山三郎と願み汝上臈履と以て伴左

衛門の一言の分説なく只打去はれてぞ伏居り桂之助山三郎と願み汝上臈履と以て伴左

衛門の一言の分説なく只打去はれてぞ伏居り桂之助山三郎と願み汝上臈履と以て伴左

衛門の一言の分説なく只打去はれてぞ伏居り桂之助山三郎と願み汝上臈履と以て伴左

衛門の一言の分説なく只打去はれてぞ伏居り桂之助山三郎と願み汝上臈履と以て伴左

追拂へと命ずやがて奴僕等割竹をとりて庭づまひも出来りいざ／＼とて退立ければ伴左衛門
門迄ぶく立あがり去づり又衣服の塵を打拂ひ山三郎と尻目よにらみていでゆきぬこれ
遣恨の起りとの後よぞ思ひ知られけるかくて後山三郎去む／＼諫言ともちひけれども桂之
助露をうりも聞入を依臣等の山三郎とてはさげんと計一向あしくどりあすより桂之助山
三郎を召出し百葉の巻物御覽をみまば此方より別人と以てもとをべし汝が役目をみまらう
へんいたづらよ在京せんも親人のおぼす所いりやかりとく／＼飯國いたすべしとわれ山
三郎心からとといへども君命もだしがさく俄に行装とどくのへて國元へまかるくだりぬ去
りしより後の誰憚る者もなく室町の御所へ定病と披露して出仕とやめ日夜の酒宴系竹
の調へ春の日も暮せんことを花にかしみ秋の夜も短しと月にかこち更も本性のなかりけり
爰又此旅館とあづくる家士は佐々良三八郎といふ忠臣無二の者ありけり兼て妻子とかび
て當館中は住けるが山三郎飯國の後の桂之助の身持益あしく成行けると深く悲み桂君の前
よ出て諫けるの虚病とかまへ玉ふのみから旅館よ妾とめしつりひ玉ふ放佚無慚の御行
跡若室町御所よきこえなバもしき大事御家よもかへはることよはんべりこひねがわくの

藤浪よいとまをつりはざれ御身持とあらためくごさるべしと何の憚る所もなくおもふむね
をのべてしむ／＼諫言せしかども桂之助耳も聞入を日とかひて悪行つものりければ三八郎
燕々思ひけるのかくむかり詞と盡し理を糺して諫まうそよ御聞入なきうへのせんをべあし
これ畢竟藤浪が色香よ迷ひ玉ふもゑされバ彼あらん限りいかよ諫申とも悪行やむべか
らぞ根をたちて葉とくらその道理なれば折とうかひ藤浪を殺しかのれ腹かきやぶりて死
るよまかじ科なき女と殺の情なしといへども御家よいうへがたし越の茫蓋西施を吳潮よ放
ちたる例もあるものごとつひも心を決してよき折もがなと思ひ居るに一夜時ならぬ夜嵐
の烈しきを幸ひとし身輕よ打拵て奥庭よしのび入樹木の茂たる所よかくれて藤浪が部屋よ
下るを待居たり藤浪のうくと露しらす子とくる比服の前を退きほる酔の機嫌よてみづく
ら手燭をてらし淡紫の小袖のつまとりあげて長き廊下と歩み来る三八郎うくと見るより
氷をぞ刀を抜らばめ今を盛よ咲亂れたる山吹躑躅早咲の燕子花と踏ちらしやり水の流れを
むぶちたる庭石を飛越て廊下の手そりの下をつまひ藤浪が跡とつけて今や斬ん／＼とつけ
ねらふ藤浪の何の心もなく歩みけるが此時一命の終るべき宿世の因果もやありけん風雨す

そくつよく爛熳たる庭木の櫻と吹ちらして吹雪の如く散り、り手燭と颯と吹けて忽
異の闇となる嗚呼彼が命の危さもげも風前の灯火なり藤浪進退を失ひて心たゆまひける所
も暗裏も剣の光り雷光火石と閃きければ驚き逃ゆかんとせるを三八郎ひとりかゝりて斬
つけたるが暗中なれば目當ちがひて空を斬るこれいと又斬剣の下とくゞりぬけて遺棄去ん
としけれども餘りも驚き身うちわななき足なへぎて走るとあたは走還路も迷ふごとくなり
三八郎の息をこらしあふりを探りて立まはりめつゝ斬みきりけるよぞ藤浪振袖の袂と斬落
され危く身の遭たれども目前も剣のひらめくたびく胸冷魂さへて黒暗地獄の罪人が剣
樹よのぼるにとならせ三八郎ひまどりて仕損せまじと心せかれ衣よとめたる蘭麝の薫る方
と心當りようかひひをまして斬つけたれば手ごゝへして呀とさけ仕をましふりとたゞみり
けてきるよぞあはれむべし藤浪のまきる聲とよもよのけさまなりて背後なる杉戸はづれ
おしよなりて墮と倒る時又奥深くさてたる灯火の光りもれ来るよ乗じてその形勢を見るよ
無慈悲やな左袈裟も斬ざげられ鮮血泉のごとく涌流て身うち朱も染り手足をもがき齒をうみ
ならして苦しむ体見る目もあてかねたり三八郎せめて苦痛をさせしどおもひつゝ乗かゝり

て呪にとゝめの刀をさしどはず嗚呼悲哉嗚呼痛哉十七歳と一期として實泉の人となり
よけりかくて三八郎袖引ちぎりて血刀よまさ肌おしくつるげ己も腹よつきたてんとせしど
俄もおもひなほしけるいなく今死をべき命にあらせ人の見とがめぬころ幸ひなれ不
道夫が爲体お家と亂をべきさざしありこれよりすぐも出奔し權命とながらへてよろな
ら主君の目代となり彼が惡意と見あらはし其後此藤波が所縁の者の恨みの刀よかゝりて死
んころ武士の道なるべしと心とさぶめて死體もむかひ忠義の爲どいひかから料なきかこ
とど無代も殺せし不便さやがて此身も刀よかゝり冥途において分説せんと掌を合せ南無
阿彌陀佛くと口の内も回向して退ぞき出んとしたる折しも藤波が妹の於龍姉の下りのい
つより運きて素じむかひの爲手燭とともして何心もなく此所まで來り、り三八郎と顔見合
せ此血しほいとどろきて聲たてければ三八郎手バやく刀の銀打に手燭をはつしと打落し
吻のため息つきもあへず又庭のたひに逃出けるが深夜といひ夜風ますく烈しければ誰一
人これと知者なかりけりうくて三八郎我家よかへり妻磯菜よしかくの事を語りけるがは
しく身支度してたくはへの金子を懐よしかのれは今年十二才よなる楓といふ娘とせかひ

妻よ七才にある栗木郎といふ男子とおはせ夫婦しのびやか後門より逃出けるか四方晴
くとして東西と辨せ雨のや、つよく降て襦をつかぬるがごとくされども面衣まぶし身
まつけねと濡衣星よまどひつきて歩みなく素足なれば道ぬかりて心のみ前よりいで身と
とへ引るゝこゝちしお不えを背後と、馴れハ怪哉心火心つと燃わがり雨波が突りけるひ
のごとくわらとれて行をやらじと引とむる三八郎此時身うちぞつと冷とはりけるが刀と振
て斬拂ひ妻の手とどりのくむかふへ又ばつと炎燃て雨波が委とくと立なほもやらじとさ
へたり妻子の目よは見へねども三八郎か目前よはまぼろしのとくつきまどいり此よわら
れ彼處よ立て斬と拂へと立さら走勇氣烈しき三八郎も身うちしびれ星あへぎて走ることわ
たはず妻の襦衣もゝろどもみたちくゝと引戻され髪も亂れもそろも疵れ身体すくみて倒れ
しがやうく心と願して百歩ばかりも逃去時烈風颯とおろし来て大粒の雨つぶてを打か如
く降かゝり一團の心火むとを運て飛來り見るゝ空中おて二ツよわかれ一ツの娘柳が懐
中よ入一ツは栗木郎か懐にいりぬ是則藤波が死靈兄弟の兄等よつき恨を報る一端あり

○ 雨中の怪談

かくて夫婦こけつまつびつたゞ走りに走り幸じて途に逃のび先身體志なきを喜びけり此時
にいたりてやうく風雨おさまり雲はれて臙月さし草の緑に影うつるを便に北山を過ぎ
杉坂を上りあまりに息だゆければ茂林のうちにいり夫婦背上より兩人の子をおろして岩の
上に尻かけ濡衣をまげり清水に咽をうるはしなごして權やすらひ居たる折しも坂のうへよ
り若くうつくしき女ちらし髪素足にてぬかり道をびまよと歩み來ぬよく見れば
にかわらん烟のやうにて鬘人のごとく人の形なたるもの女の前には糸のやうなる手をわけ
てさしまねけば女星をはやめて歩みまねかされば女男といまり頭を傾て物をおもふさま
り女男といまればかの怪物又手をあげてさしまねくかくまつゝ女鬘の下にいたり權た
たすみてさめとと泣居たるがりの怪物楯をゆびさせば女あふき見てうなづきなをさめさ
めと泣涙楯の串とかちかゝる怪物女鬘の楯をゆびさし物打かくる仕方をすれば女うあづき
前後と馴つゝやがて腰帯を解き木の枝に打かけたり三八郎妻ともにも木底の暗き所にあり
此爲體を見て暗に思ひけるハ彼怪物ハ世にいふ死神なるべし首懸領あといふものありて前

に縊死したる者の亡魂樹下にとゞまりて死神となり人をいざなひて縊しむと世の諸相に
聞つれども眼前見るのこれがはじゆあり我忠義の爲といひながら斯なき藤浪を殺せ
みづから悲み愁る事深しせめて此女とたすけて藤浪が冥福をもとむる程ともなし怨魂とな
だむる便ともなしてんとおもふうち彼女西にむかひて掌を合せ念佛數遍となへはどく縊
死んとするをやれまてまばしと罵かけて走り出背後より抱きどゞむ女いおもひがけざる事
なれば打蕪き故ありて死なねばならぬ者あれば赦して死なせてよ折角思ひさうつるものと
二度のおもひさする人よとつふやきて又縊んとするをまかどとゞめ一命と失んど思ふは
なれば定めて迫りたる事あらんがまづ其縁故を語りいへ若我力に及ぶ事ならば力を盡して
救ひたく思ふありといふ女情深き詞と equal 御何方の御方かい知らざれども誠に慈悲深きかふせ
なりさりながら其故を語るどもとても生ながらへがたき身なれば此儘に見捨て御通りくだ
されかしといふ三八郎かさねて言けるの見ず知すの者なれば卒爾に語たまのぬいうべなれ
世の常言に藤浪も談合せよといふ事あり何にもあれつゝます語りいへかしと誠心面にあ
らわれければ女權思案し左ばかり深き御心を無下にせんもいかいなれば一通り語りはべら

ん妾の世邊に住武士の源人の妻なるが家貧によりさきだつて先祖傳來の物を金二十兩に賣
入したるを夫の妹なるもの聞およびてこれを愁ひ二十兩の金子を合力しくれつるゆゑ今
彼賣物を受戻しまゐれど夫いひつけ侍るにより金子を懐にして出たるが途中にて監人に
あひ残らずとられ侍り合力したる妹の手前といひ夫に對して分説なく面を合せがたけれ
縊死んと覺悟をきめいなりと愁の色を面にあらわして語りければ三八郎始終を聞それ
れば死るにおよばず幸ひ某少の路銀と携へたれば其金の數はと合力いたすべしこれにて
賣物を受もどいへとて金子二十兩出して與へけるが女これをうけず誠に極慈悲の深き
骨身にどほりておぼゆれども所縁のなき御方より金子をまうらうけいと夫に語りばかへり
て快よく存じしまじ去とて語らざれば夫と欺に似て女の道たち侍らすいづれの道にも死な
ねばならぬ身の因果今宵に迫りいといひてかつる涙淵のごとく三八郎其詞を感してもつと
もと點頭懐中の金子を財布ながら取出しかの金をいさつに入て地上におまゝ某談まつて此
金をこゝにおとしつるとかん身はからず拾たり凡道に知らたるを拾ひ其まの出たる時其物
をわかち與ふるのなき例にあらねばかん身二十兩の金子をうくるとも耻ならず某々與ふる

とも思ならずと理を盡して與へけるにぞ妻藤原とやらすおん身のごとき大慈悲の人の世
に又とあるべからずよも凡人にてのいまと観音菩薩かりに身を現して愛を盡ひ玉ふならめ
と掌と合せ再三拜みまかるうへに權此金と借用いたし後日此身と偽てなりとも退きまら
せんそも御身のいづくの御方にて御側名何とまうしむを妻が夫の御名といはんとせし
を三八郎いそがしくとやめいさく其御名あかしたまふな某が御名も言まじ金子返御を
うくるこゝにあらすおん身の夫の名を聞我名を聞ればおのづから思を著するの理りにて
某が意にあらす深夜といひ旅人の身殊に足弱を伴ひ道をいそげばひとどりがたし御縁もわ
らばかさねて相見ゆべといひすてゝもとの木蔭に走り入れれば女の涙を流しつゝ金を押し
たいきとりおさめえばらく跡を伏拜みもと來り道へ急ぎ去ぬさても右近の馬場の館にかき
ての其夜藤原が妹於禰姉の死骸を見つけて大に驚き聲をたてゝよばりければ侍宿の武士
等馳集り大に騒動しいそがしく主君の前に出てまうと告ぎこへければ桂之助あつて
まどひて那裡に到り藤原が死骸を點檢して且驚き且悲み何者の所爲なるやと疑ひ外於龍
めして事の様を問けるに佐々良三八郎が殺したるよしを告る折しも笹野蟹藏いるがしと

駈來り百疊の巻物紛失いたしゆといふ桂之助益壽き館中をこまやかに尋罷あるに三八郎家
財の捨おき妻子を携へ逃去長谷部雲六も出奔の體なりと申しければさては彼等兩人いひ合
せて百疊の巻物を盗取たると藤原に見どがめられせんうたなく害一さりたるにうたがひな
し足弱をともなひたればよも遠く走るまじ追人どつかのいはやく捕へまひべいと命は
るにぞ四方に手分りて追行けりかくて翌朝にいたり追人等立かへりていづくへ逃去しや
ん影だに見えずと告げれば桂之助只あされたるをかりなり是さへ不慮の騒動あるにまた宿
直の侍士まかりいで御國元より執權不破道犬自身に夜中をも顧みず來駕いたされいと告る
桂之助眉をまはめ先つて何の用でも首越べきを道犬みづから上京せいのいとも心得ざる事
なり何事やらんと心ならず待居たるに程なく不破道犬旅裝束の儘にてうち通るその年日順
どなれば總髪の上に素書といたやまのみたる類に老の波をたへへ老年といへども身軀す
くよかにして奸佞の面野狐のとく貪欲の眼の鳥雁に類し相説きひめて兇惡なり笹野蟹藏
屑三平十子泥助犬上雁八等四人の者も跡につきてまかり出ぬ桂之助道犬に對面し先別事
いのす俄の上京何事やらん氣づかひしどおはせければ道犬氣の毒顔にいひけるの火急の上

京別義にいのすちかざる君御身持わしく旅館におのしなから白拍子を召抱へて妾となした
まひまりのみならず虚病を構へ伏遊宴樂に日を費し御所の勤仕をおこたりたまふよし管頭
驗濱名入道殿の御聞に達し積斥すべきよし御内書あり若き御勘當の御事なり大殿の御目録
罪大威の御身にもおひたまふべき由あればせんすべく御勘當の御事なり大殿の御目録
の罪状補覽あるべしといひて懐中より一通の狀をとり出してさしおけば桂之助どりあけて
讀もおぼらず胸ひしとつゝ大に後悔し只さうつふさて言ばなし道夫かさねていひけ
るの徳の蟹藏藤原三平十子泥助犬上雁八等四人の者君の御傍にありながら御諷もせずかへ
つて放埒をすゝめやたる條其罪輕からず切腹をもおふせつけらるべきはづなれども大殿の
御慈悲を以て後門より追拂へとの命なりと云渡しければ四人の者おけ首してさよわり
ける道夫又いづく只今御次にてうけたまわれれば佐々良三八郎長谷部雲六といひ合ひせ昨夜
百疊の巻物と盗み御妾藤浪とやらんを殺し逃去たるよしさわる内亂の起るも總て是君の御
行跡よろしからざるがゆゑなりかの巻物の御家の重寶といひはまだ室町御所の御覽も濟ま
ざるよし若是等のと此うへ御聞に達しなばいかなる御答あらんもはかりがたし御痛ひしく

のいへどもとくく御出退いへか後日某身にかへても御飯參あるやう取はかりひやすべ
一 只恙なくおのしまして時の至るを待たまへうの女の死骸の縁者を召呼て引渡ししべしと
いひて先おのれが家來に命じて四人の者を追拂のせければ桂之助もせん方なく打去はれ
つ 出去ける心のうちおもひやられて哀さうくして道夫藤浪が縁者をよび死骸ならびに妹
龍と引渡し館の財寶雜具をとりおさめおのれが家來をといめて守らせたに飯圓をい
ぎけり「後」此時の子細を聞に是皆道夫が奸計より出たる事なり近曾由理之助藤基濱名
入道兩管領確執となり入道藤基と打亡さん結搦専ありけるが兼て不破道夫濱名入道に内通
して細諸管領の權威とかりて奸計を施し佐々木の家を奪ひ濱名の味方につかんと約し兒子
伴左衛門其餘蟹藏等に言合めて桂之助に放埒を勧め密に濱名に管内書をいひせて勘當を
受けぬ故と蟹藏等四人の者を追拂て一家中の心と意させ伴左衛門と共に他所にうくまひか
き何不足なく扶助して己れの目代とし内外より事を計んたくみなり只己れ等が一ツ足より
とでびる伴左衛門藤浪に懇事したると雲六が巻物を盗て逃去たると此二ツのみなりとぞ

○ 荒家の奇計

山城國葛野郡松尾の近きに梅津の里梅津川といふありどもに古歌に詠じたる所ありそのか

み元享の頃此里に梅津豊前左衛門清景といふ人ありけり此所の領主にて家富榮へたる武士

なりけるが其此月林大幡國師洛北岩藏の菴室におひすを深く尊信し法名を是球と稱し領所

のうちと附與して禪刹とす今の大梅山長福寺といふ乃是なり清景の墓今に此寺にあり扱

此清景の子孫に梅津嘉門といふ者あり累代此里に住けるが漸くは零落し今嘉門が時にい

たりて益困窮す嘉門年いまだ初老にいたらず聰明秀膽力人に過世に希有の英雄なり曾て

六韜三略に眼をさらして軍略の妙所をさしめ弓馬鎗刀のたぐひ武藝の奥儀を曉り天文地理

神機妙算進退懸引の道其理を得ざるといふとなしその故に英名くくれなく高祿を與へてめ

し抱へんと懇望の諸侯おほりけるが名利に屈するをさらひて仕官をのぞまず常に松尾山

に登り採藥して藥店にひさぎ細煙とたて清貧とまもりていざいかも奢の心かく一人の老母

に孝行を盡し姿も斬髮にやついとまに先祖清景大幡國師より傳來の禪味をあまんじ世

に諂らぬ暮し實に一世の賢士との知られぬ母も又賢女にて今の世やうやく治平といへど

も仕へさすまき明君なりと心と決し嘉門が名利に屈せざるを喜びて手づから布と織りて日

日の數にかへいざいをも貧者と思ひす暮らぬ然るに頃日替星あらしむるににより諸人心安か

らず吉凶を辨する者なかりけるが一夜嘉門椽先に立出くの星をあふぎ見母をまねきてい

けるの抑我朝に替星あらしめられたる事皇極天皇の御宇蘇我の入鹿叛亂の時始めて此星あら

れしより今にいたるまで一度も祥瑞なるとなし凡替に五ツあり其色蒼きとき王侯成れ

天子兵革に苦しみ赤きとき凶賊起りて國人安うらす黄なるとき女色害となす白なる

の替星其色蒼に黄を帶たりまさしく是牝雞晨して婦女權を奪ひ天子兵革に苦しみ

光にていんん母人のいかい思ひたまふやらんと言は老母點頭我もどくにその心つき

狐狼の伏土とならんこと遠からじはやく此所と去り山林にかくれて兵亂を避るに去く

からずといひけるが此後果して應仁の大亂起りぬ母子兩人の先身願に是あきらうかりとい

ふべし此頃由理之助勝基濱名入道兩官領なりしが勝基の濱名が増にて去たしきうへ子なり

ゆゑ濱名が子を養ひけるが勝基實子出来ければ其養子を僧とすこれより兩家相執となり濱

名勝基と打ちしかのれいどり權威をばしいまにせんとしし密々野伏殺人どもを有抱へけ

るが嘉門が軍容に達したる事と聞および付抱んど使者を以ていひ入り嘉門の兼て入道が
行跡を悪み居たるうへに使者のゝぶる所専ら官儀職の權威をふるひ無禮の詞はみかりけれ
ば嘉門心中に憤り招きに應せざるのみうかへりて入道が日來の不道をかぞへてさみし辱
しめさびしくいひはなちけるに予使者面目を失ひはうくの體にて立取り入道に嘉門がい
ひつる様をあからさまに告ぎこゆ入道聞もあへず大に憤慨しやみれにくき原儒者めか
目を見せて御悔せんぞ家來岩城猪之八といふ荒男に大方の組子二十餘人を撰與へ彼奴も
智謀武術に秀たる者なれば若手にあまらば首にて持かへれど命す血氣にはやる猪之八か
しこみいと管へ小具足に身をかため彼奴たとへ捕が智とたくのへ義經が早業と得たりとも
瘦浪人の分際何程の事かあらん黄土小屋を踏つぶ首すぢとらへてかへらんと廣言吐ば思
慮もなき組子等いざみすゝみて相えたがひ梅津の里へ急ぎゆく嗚呼嘉門が身のうへ危うか
りける次第なり此時宵闇の夜なりけるが猪之八等嘉門が家に近づく頃月影あがりて明かな
り嘉門の燈下に書を讀壁人あかり障子にうつりてたゝかにみゆゑで打碓の音するの老母の
手業とおぼし猪之八等の竹林のうちに身をひそめ櫓く便宜をうらひ居たり

○荒屋の二

嘉門の宿鳥の鳴さはぐと聞つけあな笑止や我推量にたがは老命をらすの悪人ども我家を
とおぼえたりいで皆殺しよまてくれんすと灯火ふきけして其後音もなし猪之八これを聞
くき奴めがいひごとかなはやく搦捕て手柄よせよ者どもと下知しつゝ先よそよみて門外
り聲高これの管領職の嚴命とからふり嘉門とめし捕さめ岩城猪之八むかふたりいそぎ門を
ひらき尋常の繩りこれとよむこれ障子のうちよ阿々と笑聲し汝等ごとく置置いふる
たとへ濱名入道みづから敷白駒と以て攻るとも更よおそるゝ所あし嘉門が居宅の鉄壁石門
要害堅固の城廓も同然なり命あしくバ頭とおさへてはやく逃うへれとおさけりいふ獲之八
等大に怒門をひらうんとするよ堅とさしりまやものくしと力とさはめてぐつと押し
ぞゆるまりてくつろぐとえいやつと踏破り大勢一度よこみ入て楹の上よ飛上り障子と
とひらけバ一間をへびて梅津嘉門前實業の腹巻のうへよ金紗の道服を着し金作の圓扇の
太刀をはち手よ文武武曲の二星を畫たる軍屋ととりて床机よかよりたる形勢志願堂を威風
凛々としていうよも一個の英雄と見へさうけり老母のふるびふれども摺籠の書換様の桂衣

ケ意折て若し雪をわびむく白髪をたれ事ださきかけてういどしく打拵銀の煙巻たる長
刀を小脇よりいはさみて傍よりへさる姿老木の梅よりよしの薫裂りて興ゆるしるの方
は千金簪と稱して一發數十の箭を飛せ兵器とそゑ右より近頃鐵圍より瀝り磐石をも打碎く
火筒の具五六挺筒先とそろへてならべたり動こみたる組子等飛道具に心おくれをもみ兼ふ
るぞ見て猪之八聲を罵し臆甲斐なき者どもりなわづりに嘉門一人の外いかよわき老女なり
たとへ三而六臂ありともいりてか數々の箭玉をはなつことわたえんや見せかけむりの兵
具おそろくにたらずとやくよりて擲捕者とり逃さば我々の趣度なりと下知せるにぞ組子等
げにもざりと思ひ我先とわらそひ飛かゝらんとまざる所に嘉門軍馬をわけて一むきむき
げに兼て用意の焰筒繩に煙火うつり綱火となりて五六挺の火筒の具一度に發し其ひびき大
雷のごとく數の鉄丸飛出て前にまゝみたる組子十余人打倒され煙のうちにのさり伏せ老母
の長刀の鐔を以て簪と一きつけば數十の箭雨のごとく飛りよりて組子と残らず射伏たり
猪之八手心やく壘と盾にして箭玉をのがれ逃出んとまざるに忽板敷釋落とひるがへり深
き落し穴のうちに腫とおちりり底にうゑたる駒に身をつらぬうれ朱に染りて死してけり嘉

門かかて長等のかまへかしおれたるゆゑさひりなればこれまで近國他國の諸侯の請待も應ぜ
ざれば若おのれが器量をねらみ不意と襲ふ者あらんとふせらん爲なるが果して此度不慮の
難業とまぬうれたり斯て嘉門老母もむかひ今宵のことを聞ば漢名入道益怒多勢と以てと
うこまバのぐるよとてなかるべし幸母人兼て山林も身を避て生涯無事を訓玉はん心お
れば今宵中も此所とのがれ去らまかじ母人のいごとおぼそやらんといふ老母その意も同じ
母子兩人いそがはしく身支度して難具の其儘もておき先祖傳來の長家の秘書大輔國師の法
語一巻のみと嘉門が懐よし老母を介白て何處共無滞往けり

○厄神の報恩

初も佐々良三八郎の妻子を具して丹波の國もいたり大江山の麓穴木の里もかくれ住けるが
少々のはなくはへ日々の費もつかひそて別みなりはひの無もかければみつうら山州とたがや
し任朝ぬ業の幸吉もたへを妻福榮の常國の名重なる蘭建と稱すもひさぎてわづらの價とと
り夫婦ともりせさまして兩人の兒等を育種く月日と送りぬまかるに三八郎思へらく島津の
爲といひひかから罪なき藤波を殺せし事うへそしりも不便なり後も聞ば若殿御勘當どうけ

られ御行方なくなり玉ひつるよし我心づくしも藤波が非業の死もみな木の泡かひなき事と
されりせめてい彼が冥福と得る種ももと農業の片手も念珠をはなさざたえ念佛ととな
へけれバ里人異名をつけて六字南無右衛門とよびけるをみづうらも世を忍ぶまいよき名不
りとおもひてつひに實名としさりけりさて又後々聞バ藤波を殺したる夜金剛の筆百疊の圖
の繪巻物紛失し長谷部の雲六と討りて盜取たりと沙汰ありつるよし盜人の立田の山よ入て
おあじかざしの穢たる名を得ること豈耻ざらんや濁れども盜泉の水と飲ず飲れども惡
木の陰もやそまずとこそ聞ものといりよもしてかの巻物とたづね出し汚名をそとがをやと
兼ておもひ一ツよの奸臣不破道犬が惡意と見わらはしてお家の禍の根々たち藤波が縁者よ
出會して恨の刃より死後の名と清くそべしとおもひさごめ折々面をうくして大和の國
まいさり或ハ京都にいさり便宜をうかひぬかくてある日大和より京よ想とて木津川の渡
船に乗けるよ舟中乗合のうちよ一人の老女あり紅裏の昔摸様のふるびたる小袖又松皮菱の
紋つけたるを着しささやうなる包を三輪くみたる腰よつけ細瓦竹杖ふそがりたるが頭の佐
野の白芋を亂せるが如く身うち枯木の様よ瘦がれされと人品のさまで賤からる紫の小袖着
たる女の船中よあると深くいみきりふさまよ袖とおもてよおほひて片をみよひをまり居

さりほどなく船向の岸よつき南無右衛門衆人とともよ岸よのぼりうの老女と後よおくれ前
よそよみて行けるよ此時紅日西よ落て天色既よ晚さんとそきむ右衛門草鞋のひもとむそふ
ひまよりの老女の逢え行過るが樹木おほひかよりてはの暗き所を過る時四五疋の犬出來
てどりまさ頻よ吠てくらひつうんとと老女杖をあけて打ども去走おほも飛うとらん形勢お
りかゝる難儀を見りねてきむ右衛門走りのき犬どもを打ちらして老女と見るよ深くおそれ
るよや地よたふれ伏て息もたゆげられバ介抱していいたはりけるよやよ正氣よお
りいづくのおん方りのまらされともかゝる難儀を救ひ玉ひるかさしけおさよ此御恩かさね
て報はべらんとおつく禮をのふれバ南無右衛門打聞てさむり厚き詞とおさむるよゆえを
しとてもの事よ京の町まで送り行まらるべしとて相伴ひ三條の四ッ辻よて東西よ別去ぬ
さても南無右衛門の一月をうり京都よどりまり日蟹の巻物と尋けるがその留守の間一子栗
太郎此時年八歳かりしが痘瘡とやみ母儀家を辛勞おほりよからる肥瘠の神の細とまりけ赤
幣東狭狭張子の達摩木兎すら思臥よ心よつけ萬の頭巾とも針とるとと思て隣家の手をかり

愈して喜ぶ間もなく再又一ツの災をいできよける機業ある夜灯をたて鏡をひらひて髪と
りわけつるは鏡のうちは藤波が顔ありくとうつりておそろしきさまなればおきやといひ
て背後とかへり見れば謎のごとき心火窓とこへて飛さり家のむねのあふりよてからくくと
笑ふ聲を機業はたまらまのけさまたふれて其儘絶入ぬ南無右衛門おはてふふめき抱き起
して醒薬など與へるまどやうくいきうへりけるがこれより心氣日々よはりてものも
そとます色あざめて瘦むとろへ日は異なかもりていつ意りはつべうも見えまきむ右衛門
まづしき中よも良薬をもとめて與ふるといへどもとかく藤波がいくれる顔目さきまよさへぎ
り其度々よもまへ苦しみほとく命もわやうく見へぬ此時娘楓の十三歳栗太郎の八才なれ
ども兄弟ともも年よ似せすぐれてかしてこき生れよて殊更世間よまれある孝子なれば母の病
とふうく悲み兄弟枕方あよとべよつきそひてまをしも病床をはなれずりくるくもみさそり
などし心と尽してぞ看病けるかゝる病人ありながら一日もなりはひとせされば烟を立かぬ
る身なればせんそべなくおむ右衛門の病人と兄弟の子どもよわづけおき其身のたがやしよ
出てわづらよ日雇のあひひを得て其日をふくる心の苦しさいかはかりならん量想べし夜よ

いたればおむ右衛門家よありて看病すれば兄弟の子ども等此うへに佛神の力たのみ奉る
より外なしといひおはせふさう手とひきあひ毎夜穴太寺の観音よはぶしまいりして南無大
悲觀音菩薩我々が一命をとり給ひ何とぞ母の病苦を救玉へと祈念し三七日之間まうでける
よ佛も孝子の誠心を感じ玉ひけるにや満願の夜より母の病やうやくおこさう一月ごかりの
うちよ全快し氣力かへりて前よりもなほ盛なりぬ誠よ是孝行の功德大なる也あかりかし
○孝子の物語のついでよ記して世の童子よまめそことあり明心實鑑といふ書よ我親よ
孝行されば子も又我よ孝行よなぞものありかのれ既よ不孝なれば子も又なんぞ孝行
あらんわれ孝順されば又孝順の子を持なり此事疑はしく思はば鐘より點々滴々と落
る雨まづくと見よどくくと落るつばをたがへずといへりされば我父母の老後を安
穩ならしめば我も又老後安穩なると疑なし
○又世範といふ書よおよそ人の子として身おはるまでそこしも父母の心よをむかす
孝道をつくそべき父母身まうりてのちも其鑑よ對して存生よいひおられたることよ
そむくべうら走いうはと孝道をつくそともかのが幼少の時父母の愛念撫育の思を

報することなりがさし世間の孝道をつくそことあはざるもの他人の小児を育む
 ぐる其情愛の厚きを見て父母の苦勞と思はゞ自悟るべし古より孝を盡して天のめ
 ぐみとらふりあるひの立身出世して高祿の人となり或は運とひらき千金と得富貴
 の身となりたる例あげてかぞふべから老又不孝にして天の罪とかうふり痛苦責苦と
 うけ惡獸毒蟲は害せられ雷ようされなどして非命死したる例も又そくなから老さ
 れば幼なきときより孝道の人倫第一の道にて決定の役儀といふ道理とよくくわき
 まへて少しも父母のおふせとをむり老朝夕恭敬かこたらず一生安穩ならしむるやう
 よ心がくべき事ぞりし

○因果の小蛇

かくて後の南無右衛門が家内無事打過けるが一日かむ右衛門たがやし出たるも草むら
 の裏より丈三尺むりの蛇いでる蟻をくわへほとくのまんとそむ右衛門是を見て蟻と
 たそけまほしくいうは蛇よ汝我爲よその蟻をゆるせうしあらば我娘を汝と與ふべきだと
 いひけるは蛇此とを聞入たる体にて蟻と放さらしめよとの聲深き所よりくれ入ぬさて蟻
 業をばりて家と飯けるお其日の夜半の頃娘楓俄に發熱して苦しみ聲たくらめきければ
 両親おどろき目をさましいそがはしく抱起して見れば恠哉小蛇楓が腹ままきつきかま首
 ととて舌と吐てうごめくさま怖しなどもおろなり磯菜これと見て身の毛いよぢり泣聲ま
 なりて取捨やりてよといふさむ右衛門いはく我晝ほど蛇蟻と呑と見てたそけまほしく若葉
 を放やらば我娘と與ふべしと言けるが此蛇我戯れを實として來れるも疑ひし戯言のそま敷
 ととなり凡蛇の姪心ふかきものと聞しが眼前よりくる奇怪を見る不思議さよといひつと蛇を
 ひきはなら番のうちよ入て携へ去大江山の谷底よ捨てりへりけるに其つぐる夜ふたつひ楓
 發熱して苦しきみいつの間まかまた蛇來りて腹よ巻つく事前のごとしかむ右衛門益恠み此
 うへに殺そつべしと思ひ蛇の首よ魂ありよく首と碎うされば生うへるものと兼て聞ければ
 うの蛇をとりはなちて平みたる石の上よかき斧の脊をもつて首と徹腹よ打くぶきけるが血
 しほさつと飛散て傍に居る栗太郎が面上よかるとひとしく呀とさけひて倒れふり南無
 右衛門蛇を捨て抱き起せば栗太郎が兩眼は蛇の血まみとほりたる様子にて痛堪がたしとて
 かめきさけひぬ磯菜もいそぎまどひて介抱するに左をしありてやうく泣止けるが兩眼は

らく事あたはせ見るく、聴たうくはれわがりぬかむ右衛門の死したる蛇を携へゆき、所
み捨てかへりけるがいまだかへらざるさき、蛇又來りて巻つくこともとの如し、かむ右衛門
氣といらち此度の焼殺さむやと火中へ投じけるがまむしありて火中へ飛出また巻つきぬ
くさま、よとして取捨んとそれども蛇の執念いと深くしてまむしもはなれを後にいせんか
た尽て其儘よきしかきけるが唯腹よ巻つきたるのみ、別に害をなす事なく、極も始めのほ
どの我身がらむをろしくもひけるが後々の蛇も馴まふしみて、前生の因果とあきらめ
へつて愛念深くなり、朝夕我食物とわうち、與へ養ひけり、蛇もよくあれ、食事の時、いたれば
懷よりうま首と出して、ものうちくひぬ、栗太郎の蛇血毒氣、兩眼へ入て、眼疾となり、さま
療せるといへども治しがたくついで生れもつりぬ、盲目とぞなりにける、磯菜左、楓とぞ、右
も栗太郎をそへ二人をつらく、願つゝいふやう、便なき子どもが形勢や情なの、神佛や、極の世
またぐひ、奇く姿美麗、生れつたたとひ、女御更衣、まふつるともはづし、からぬ容儀なる、妖
蛇、見こまれて、人の交りならぬ身となり、栗太郎の生つきもさよらか、ま心へもせぐれて、か
してく、あり、かむもひもよらす、盲目となるらふて、まよ

○厄神の二

殊更兄弟とも、孝道ふかきものなる、まきどて、うく薄命、のありけるぞや、いうなる宿世の因
果、まてかく災のかさなる事、ぞとて悲歎の涙、よむせびけれ、姉弟の子どもあてて、ふさめさ
左右よりとりつきて、脊と撫さ、り共、涙をおとしつゝ、介抱する、まいと、悲し、まま、さりけり
かむ、右衛門目とまむた、ま我つら、まもふ、藤浪が、怨念、子ども等、まなや、まし我、等、夫婦、ま
かも、ひとさせて、宿恨と報る、まう、まひ、なしかれ、一點の罪、なくして、殺れ、され、深く、恨も、理
なり、三代、相恩の主君、のため、にせし、こと、おれ、た、まひ、子ども等、と、り、殺、さる、まとも、悔、まき、ま
わら、せ、磯菜、歎、く、な、我、の、少し、も、悲、し、から、ず、と、歎、き、と、胸、お、し、か、く、し、て、い、へ、兄弟、の、子ども、等、
口を、ころへ、父上、の、ま、ま、所、う、べ、なり、忠義、の、爲、ま、ま、ま、ひ、し、其、報、ひ、と、き、け、た、ま、ひ、我、々、
身の、いう、ほどの、憂目、と、見る、ま、も、露、を、かり、ま、いと、ふ、べき、ま、わら、せ、母、人、ま、深、く、な、け、さ、ま、ま、ひ、て
又、も、病、を、ひ、き、い、ぶ、し、玉、は、る、ま、と、年、ま、似、合、ぬ、理、發、の、詞、孝、心、深、さ、け、あ、げ、さ、ま、大、丈、夫、の、か、む、右、衛、門、
門、も、胸、ひ、し、ど、お、し、ふ、さ、が、り、お、ぼ、え、ず、こ、ぼ、る、ま、涙、を、等、と、も、つ、て、お、し、ぬ、ぐ、ひ、歎、と、見、せ、ぬ、武、士、形、
氣、の、心、の、うち、か、も、ひ、や、ら、れ、て、な、を、裏、あ、り、う、く、て、又、ま、む、ら、く、月、日、と、お、く、り、ける、ま、栗、太、郎、自、

のこたれば一生を過せ世わりの類いの琵琶を學ぶと琵琶法師とかさばのちくく
ふもそくみ貴人のそ心近くめさるゝ事もあつたまじきあわらせめてい生涯安穩の詞を
あしつかはまべしと思ひつき頭をそらせて名と文冊どうへ贈答をつけていよのばせ其頭書
曲を以て名高く聞へし深角檢校の許し傳をもとめて母子どもも本公させ事琵琶を學せけり

○呪咀の毒鼠

扱も大和の國佐々木の節よあきて判官貞子息桂之助と勘當して後銀杏の前月若母子を
平群の下節よ移せ名右屋三郎左衛門岡山師父子と守役として付おかれぬ初桂之助の繼
母蜘蛛の方といふ志ざし毒惡にしてかねて桂之助夫婦とにくみいりにもして桂之助と失
ひ實子花形丸を家督よせまはしくと思ひ居けるが思ひよらず桂之助勘當の身をかりこれバ
心中ひそり喜びもし又月若家督よからんこともやとおもへば何ぞぞしてかれ等母子と失
はんとさくみぬ然りといへどもかれ等よの忠臣名古屋父子のさそひ居て片時も心とゆるさ
ねばいりにもせぬうさかく打過けるが不破道大奸智ふりければ蜘蛛の方の心底惡意ある
ことと見ぬこれ我大望とどるよと便なりとおもひ一時蜘蛛の方よ近づき好意深と休よ

いひみして探りこゝろ見るに昇して月若母子を失ひ花形丸を家督よしと望みければ道大ま
うるうへい何事も謀しひまらせ玉へよきまはうらひまらせんどうけがひけるよ蜘蛛の
りさかめならず喜びぬかくて道大蜘蛛の方と密談し先月若と呪咀をべきあさはら其頃よ
く呪咀の法と學得たる頼豪院といふ修験者といろかよまねき謝物とおほく興へてたのみけ
るよ貪欲深きものなれば速ようけがひ密室よどちこもりて修法よどかよりけるほどよ半田
の下節よの銀材前月若母子兩人移住名古屋父子これを守護してありけるが月若のことし已
ふ十一才よぞいさりけるまうるよ月若偶病を生じて打臥寝を安うらま次第よ痲ふとろへ真
醫をえらび靈藥を興ふるといへども重よなるしかくたましく眠れバおそはれおびゆること
度々なり殊更むべき深夜にいたれば看病の男女おぼえぬふりを生じ鼠おほく出て病
床を飛びぐる後よ晝も出て人をもおそれまごいくよ玉漏し月若の髪を毛をくらひ肉
ともくひやぶり頭よ毒瘡を發して痛地がさく心氣目をおひておどろけり母銀杏前歎悲し
ひとおほろさから定神佛門よ立願し名僧智識の加持祈禱を乞といへども妖鼠入りなりす
節怪色とのみ多うりけり名古屋父子の晝夜病床を以かれま看病けるが三郎左衛門岡山師

よむらひひひけるい我曾て西陽雜俎を見るよ人夜臥よゆゑあつして^いを失ふ者鼠の妖なる
又鼠人および牛馬よ若とありて晝夜逃走いうんどもそるとかしていへり若君の御寮体と
かふよ彼書よ記を所の講常の妖鼠とあむじからせうさふらくの呪咀せる事ありて
とあそとおぼゆるかり汝心とつけて惟異の出所を見わらはせばしといひければ山三郎某
も左こそ思ひひかれとてこれより別して心をもちひ飛威の四方に眼とくむりて守護せけり
さて一夜丑三のころ銀杏の前とはまめ^い手醫者乳母待女等もおぼえせぬふりと生じさる
る不思議や丈板料の大風行廊の方より歩み來る形に常の鼠よかはらずといへども其ははき
さの犬のむとくをさまじき形勢ありむなわやしやと山三郎刀を携へつらぐえつ死^い瞬もせ
ず見あさるよかの風いきはひこみて若君の病床近く飛來る山三郎いそがしく立上り刀
を抜まらうけて下と切る妖鼠はやく身をおどらして劍を避わり隙子と蹴やぶりに庭上
に走り出籠壇の上に飛のぼる山三郎追うけいで手心やく小柄を振とりてはつしと打バあ
またを鼠の顔にぞむとさら鮮血たらくと流れけるが忽一道の烟のごとき妖氣立のぼ
る

と斬つくる頼家院と身と遊平形金球をおしもみて呪文をとかふれば忽暴風ふきおこり
庭の樹木の葉をちらし池水と悉おげ寝殿大に震動し瓦落々々と鳴とよみて今も崩りとおも
はれけり時よ若君の聲としてあむやくとあめ死玉へ大勢の聲として泣悲しみて嘯びま
し聞よとさざる山三郎那津も氣づかひ這裡も參れ走ふたよび刀を打ふりてきらんせしが
頼家院口より數十の鼠を吐その鼠山三郎よ飛うより五体とくみてはさらられずあむ口おし
殘念といひつと又きりつくれば忽よ頼家院が形さへうせ唯雲霧のとぢふさがりさるごと
くよてわやめもわう浪庭上よ只ひとり山三郎拳をにぎり齒とかみおらし虚空をよらみて立
たりけり頼家院のわやらく身をのがれたりといへども山三郎が忠義一團よ精神をこめたる
手裏劍の疵治せまして呪咀の法忽よ破れければおのづから若君の病目と癒て恵り危き
命をさもちけり

○昨夜の駿馬

探も御手のうさ頼家院の修法破れ月若快氣のよしと聞て大に力とあとし此うへのいかな
る計とをもつて影等^いを失ふべきと道大とめして密談わりけるに知智あはき道犬少しも

屈せ老 再又一計を生じ御手の方の耳よつきてさやけバ御手の方とく聞これきはめて
妙計なりと喜びいつこりて重病の体をなしものくるはしきさまをなしけれバ判官貞國大
よかどろき道犬とめして醫療のことと相談あるよ道犬申しけるハ奥方の御容味とうかハハ
よハハとちらせまさしく邪崇の所爲と覺いえバたとひ者婆扇謁が神方なりとも藥の力と
もつてそくひすことのかちふべからず近會京都より下りし頼家院といふ修驗者安部の晴明
が金鳥玉兔の神書と家傳し下筵は妙と得たるものよハバかれとめしてうらさはせ聞わ
れりし幸唯今某宅よ參り居いとヤハ貞國これを聞それいそきてめしよべとかふせけれ
バ道犬りしこみいとてやぐて私宅よいひつうはしけり頼家院の頼の疵やうやく猶道犬が奸
計よくみしけるガ召よ應じて貞國の目どほりよ罷出ぬ身の丈さかく眼中光り刺髪ちやれて
らはつのごとく兜巾篠懸よ紅緞の衣と着し最多角の念珠と袖の中よ持中啓の扇と把あさ
もまばゆき金張付の廣座敷よふめきおくせき坐しふる体誠よいかかる惡魔とも降伏せべき
骨柄なり貞國まづ初見の挨拶をはり奥方の病体告て下筵と乞れけるよ頼家院恭く卦を
敷下し考を施していはく奥方の御病氣全く呪咀せる者ありて苦しめやそよ疑なし今四
五日と過をを御命危くるべし若疑しくおぼし玉は御所所の庭中長の隅の土中三ツ

堀し見給はハ分明あるべし貞國半信半疑ながら近仕の士よ命じ玉へバ近仕の土りしこよ到
り土中をほらしむるよ果して一合の白木の箱を得て携へ來り貞國よたてまつる貞國これを
ひらき見るよ内に大小二ツの藁人形ありてそき間もなく釘を打より貞國大驚きて頼家院
が詞を奇かりとしこれ呪咀にうさぐひおけれと別よ一物もおけれバ何人の所爲あるや分別
志がさしといはれけるに頼家院膝とそよめ凡呪咀の法よ願書おきてのかなひがさし其箱
これへといひて箱を取わけつらく見てやがて扇の尻をもつて箱の底とつきぬさけるよ重
ね底にして其うちより一通の願書出さり貞國これととりひらき見れば御手の方花形丸兩人
の呪咀せるの願文よて銀杏前月若兩人願主の名ありまも銀杏前の自筆ともつて書され
ばうさぐふべうもあら老貞國怒地怒氣心頭よみこり面色變じてまをらくものもいはざりけ
るガ先頼家院よ呪咀をはらひのぞく修法と頼けるにより御手の方の病床に據をかざりて災
瘴法と修しうの藁人形の釘をぬき護摩の火の中よ投じて焼せてよりかくて御手の方うく快
氣の体をさし貞國よむりひていひけるハ妾とかねて銀杏前母子を實の娘實の孫といつくし

み何とぞ桂之助の勘當とゆるしたまふりさらせバ月若て家督にしさまふやうよと犬のみ前
願ねがひあるまかれらいかへりて妾を繼母といみさらひ若花形丸家督にあらんこともやとささぐ
りして妾親子を呪咀殺さんとい計はかりいあらん美麗うつくし顔して心の鬼おによりもなほおそろしくいこひ
ねがはくい妾親子わめはかりはやくいとまを賜たまはり尼法師あまはらしともあし玉はれろしかくてあらバつひま
のかれらが生靈いりたまもと殺れはらめちどてさむかり妾親子わめはかりと感あはれさらふぞ情なさけなき銀杏前ぎんぎやくまへやと
いひて涙なみだを灘たなのごとく流ながしぬ此時花形丸このとき年とし巳みに十六歳さいいまだ三角つがひにてありけるが母の思おも
性しやうの露つゆはども似に志こころざし正ただしき生うまれあり素母もとの非望ひぼうを去これ此日の子細こころと聞きて大おほい歎なげ息いき
しかる凶事あやむしの出來ること皆みなこれ某それがしが誤あやまりあり檀弓だんきゆう篇へんの昆弟こんていの子こ猶なほじが子このごとしと
言いひ某月それがし若わがと對たいして鄧伯道とうはくどうが如ごとき志こころざししなき故ゆゑありとて深ふかく悲かなみけり判官はんぐわん貞國さだくに柳手方やなぎてがたの
恨うらみの詞花形丸このことわりが理ことわりおほき詞ことばを聞きて銀杏前ぎんぎやくまへ母子ぼしを益えきにくみ親おやを呪咀じゆじゆせる大罪人たゝいじん片時ひとときもた
けおきがさしとて黒星眼平くろほしがらといふ者を召よし出いて銀杏前ぎんぎやくまへ若月わがつき若月わがつきの首打くぶうちて來きたれと命いのちじけれバ
手ての方道かたぢうぢん犬いぬと顔見合かほあひあをまじさりとおもひながらこれとどめけれども貞國さだくに聞き入いり走はり花形丸はながた
の殊更ことさらに詞ことばをつくしてどゞいれども火性短氣くわせうたんきの貞國さだくに少しも省免あやまりかりけれバもとより道ぢう

一味の黒星眼平くろほしがら迷惑まごわづらひ顔かほにて其坐そのまを退ひき君命きみのみことといへども母子ぼしの首くぶうさんといひバ名古屋父子なごやふぢ
たやそくの渡わたをまじまじる時ときの彼等かれらとも打うちとらんとおもひつゝ四五十人の荒男等あらのしやうどを引具ひきぐ
して平群へいぐんの節ふしへいそぎゆく嗚呼あゝ銀杏ぎんぎやくの前親子の身みのうへ危あやうりける次第しだいあり此事このことはやく下しも
節ふしも聞きへけれバ名古屋父子なごやふぢ大おほき驚おどろき三郎左衛門山三郎さんざうざゑもんさんざうもひりひこれ正ただしく不破ふ道ぢう犬いぬが奸計けんけい
よて姫君ひめぎみもぬれ衣きぬとおはせ母はは子こと失うはんとはりしに疑うたがひなし打手うちての向むかはぬさき某急まがしむ
ぎ上節かみふしもいたり一命いちのみこともかへてもサまひらさして命いのちと救たすむらせんといそがはしく禮服れいふく
を着きりへ襟先えんさきも馬うまとひかせてひらりと打乗うちり供人のそろふひまもおそしと心こころせき鹿藏しかざうといふ
下部しもべも提灯ていとうもさせ走はり出いるとまたるも三郎左衛門山三郎さんざうざゑもんさんざう氣いきもかきり提ひづ
らも取とりつきつゝ親人おやぢの如ごとく在あるまじき道ぢう犬いぬの奸智けんちおほき者ものかれバかからせ彼かれが詞ことばと
まかち共とも罪つみと得え玉たまふを一言いちごんの詞ことばも心こころとつけてのさまへといへバ三郎左衛門さんざうざゑもんうちうあづき
それ合點あてんあり必かならず氣きづらふ事ことありれかよる内亂ないらんの時ときは側近たがひぢ者もの等らも油斷あぶらだんからねバ唯ただ
此この二方ふたはたをよく守護しゆごとべしといひ捨て一鞭ひとむちあて飛とぐごとく走はり山三郎さんざうざゑもん身をそとめてより
げ見みゆるまで見みかくりけるが折をりしもねぐらももどる夕鳥ゆふとりいと悲かなしげも鳴なを聞きく鳥とりさきの

あしきの二方の身の上親人の身のうへういづれにもわれぬな氣づきはしと吐息して胸といたむるをりありこれぞ一世の別とい後よぞ思ひまられる愛よ又不破伴左衛門重勝の先年君命といひひながら名古屋山三郎は草履をもつて面を打れしとふくく遺恨と思ひ佐野蟹藏瀧尻三平土子泥助犬上雁八等四人の者より夜々平群の館の近邊と徘徊して山三郎をつけねらひけるが此夜も此邊お忍び来りてうらひぬ此夜の宵闇といひ空ろきくもりて星も見え走あやめもわりぬ暗夜よてありけるが三郎左衛門鹿藏は提灯持せ馬と飛せて急ぎ来るを伴左衛門等五人の者三本傘の紋つきたる提灯を見て山三郎もうさひなしと思ひ物蔭より一同おどりと出まづ提灯をばつしと落せば鹿藏飛せたり一層は手とつけて何考なるやとそりし見る三郎左衛門の馬といひぬ此の辻斬の曲者か盜賊の所爲かといひつゝ肩衣はねのけ一刀を抜ながら馬より飛くぐるひまもあらせ伴左衛門が斬つくる白刃の稻妻目前に閃ければ老功頼智の三郎左衛門馬のうげも身を避るにぞ伴左衛門が刀いさづらよ鎧よけつしときりつけて火花ばつと飛散り暗夜といひ木立まげき所なれば一寸先も見わからず瀧尻三平土子泥助馬の脚音と心あてて前後よりさりとくるよ目あてちかと思はず兩人同士打よ丁と打合を劍の下をくゞりぬけて三郎左衛門はらひぎりまきる刀天上雁八が鼻のさきよ先りければ胸ひやりとしてのけそりけり伴左衛門心中も此時を過さばいつう恨とはらさんと思ひつゝ息とこらしてうらゝへ三平泥助雁八等もあつりを探りて立まはり或の互も同士打し薄手をおひ或の木立まきりつけて氣をいらつ三郎左衛門は今宵よせまる大事とかうへたる身おれば好て戦ふ心なく早く此場と通れをやと氣おせけども四人の者よりこまれてせんそべなくうらゝひとましてきりつくる刀三平が片耳をそぎ二の太刀は雁八が小指とさきり落しければ兩人心臆してはたらくことわたはせさて泥助がさぐりよつたる刀のきつさき三郎左衛門が刀よ丁と打合たぐひよこぞと思ひつゝ丁々はつしと打合たり伴左衛門その太刀音を心あてて拔足して背後より勢こみて切つくる刀あやまたず三郎左衛門が肩突七八寸切こみぬ痛手も屈せぬ強氣といへどもさそ老人なればさちくとよアめく所を伴左衛門たみみかけて左の脇腹深く切こみければ三郎左衛門こらへず一聲呀とさけびて尻居も腫とさふれたり伴左衛門探りより響つらみてねぢんせこれハ伴左衛門重勝なりいかよ山三郎汝君命といひひながら先年我と辱めたる恨骨髄よととりて忘れたし

今其仇を報るぞと懐中より物よ包し草履のうさしを取出しこれの先年汝我と申め
たる上草履なり臆玉よこさへよといひつゝ連打み打けるよぞ三郎左衛門苦しげと思つさ
汝等の辻切か盜賊うと思ひつるよさては伴左衛門等一同よかどろきけり三郎左衛門刀よと
はといふ聲聞て扱ひ人よがへせしかと伴左衛門等一同よかどろきけり三郎左衛門刀よと
りて立上り兒子に仇をむくふにもせよだまし打とひ比賣な奴我年こそ老され名乗合の勝負
ならば汝等ごときの鼠輩ども數十人來るとも物の數といふもはねども暗打よせらるゝとい
武運よつきたる身のはてよ死る命のあしうらねど唯心残りは二方の安否と聞で相果るう
あしさまと言つゝよろばひまはると伴左衛門をかし見て合破と蹴倒し山三郎と思ひ外運の
尽たる老ぼれめ山三にあらぬ殘念あれと汝を打しも又此方の幸ととるごとわり間話言
ぞとく死ねうしとよくさげよ誓りつゝめつゝ切よ切ければ三平泥助雁八等も三郎左衛門が
苦痛の聲をきるべよ立よりて寸々よ斬つけ論のやうよぞなしたりける折しも寺々の鐘打交
て諸行無常と告渡り小田の蛙の鳴さちていと哀とそへよけり僕鹿藏の先程より笹野盛藏
と渡りぬひ深田の中よ踏こみてたかひよ呼吸の息を心めてあ戦ひ双方薄手をふひたりけり

鹿藏のいかる危急の中あれど三郎左衛門と伴左衛門がいひあふ詞を遙み聞つけ扱ひ彼奴遣
恨みより人たがへしてはやほ主人と手よかけしうと仰天し蟹藏と捨て主人の聲する方へ探
りゆんんとそるを三平雁八のさせじと立ふさがり兩人ひとしく切かけさり鹿藏これと丁
とうけどめ又もゆかんとしる時雨雲はれて一輪の明月皎々とかやき出木の間ともりて
光り明らかかりければ鹿藏五人の顔を見るよ伴左衛門とはじめ四人のもの皆見たりる者
どもかり五人の者も鹿藏のいかねて見まりの下部あれは生おきては後日の妨さげかりと一同
にどり巻てきつさき揃へ切つくる勢猛鹿藏も双拳四手よ敵しがさく殆々危く見えたる所
よ三郎左衛門が乗馬一聲いをえて荒出し五人の者と踏たふし踢倒しければ五人の者の大よ
狼狽はたらさうねてぞ見えさりける鹿藏大わらははにあり命と限りは刀をまはし四面八方を
きりさつる五人の者一方の荒馬よ踢ちらされ一方の鹿藏が此物狂ひよきりさてられついで
敵もるとあさはさいちあし出して逃いさせば鹿藏主人の敵のささじと叫はりつゝ衆人走
りよ廻りけりかゝる折しもむつふの方より黒星眼平四五十人の健男どもを引具し山神灯と
前よたてゝ行列をつらぬあふりと拂ひて足をやよとみ來る鹿藏これを屹と見く正しく是

上節の打手からん立飯りて註進をべきり彼等と出て仇を報らうと心いニツ身の二ツゆきで
の思案しもどりての躊躇しふあじ所をいく度うゆきつもとどりつひまこりの黒星眼平の時刻
をうつさ老平郡の下節はせむひこれの大殿の嚴命をかうむり銀杏の前どの月若どの親
子の両首をたまはらんさめむうふり名古屋父子いづくもあはるどはやくは二方をわたせ
べしと聲たうらうよよべりりければその一大事と邸中大に騒動し名古屋山三郎走出其儀先
刻當節は告るものあるより父三郎左衛門は助命と願ふ先刻上節へまう越ししへ父
が飯りひまでまをらく猶豫くださるべしといはせも果すいさく嚴命かれ片時も待こと
相からず若し違背まかよむ、某奥へ踏込て首給るべし返答いうにといふ山三郎まう
るうへの是非におよば老 某命あらんかぎりのは二方と渡をことのみかりからずといひつ
はや身支度してそいといは、斬死をべき 勢 かり眼平あざと笑ひ大殿のおほせと背く不
忠者先彼を打取と下知それバ大勢一度は亂入し山三郎とどりかこみ火花をちらして戦うひ
けりこなさの多勢山三郎のた一人といへども忠義をるとき太刀さきに斬まくられ去とこ
りつれて大庭はなつといひ山三郎奥の門はははのり

左右うけとまゝの一日節とわたりのきわれかしといふにぞ月若の乳女相木といふ者
女ながらもかいとくしきものよて妾の若君をわづりておちゆくべし山三郎の姫君を守
護してわたちのさあれうしといそがはしく身支度し若君とせおひ長刀と小脇よかいこみ
て後門より落行ぬ山三郎の姫君とおひまゐらせつゝいてのぐれ出んとしたるがとや後門よ
も打手のつはもの立まはりてさへこれ山三郎まやものくしとよむこりつゝ多勢のう
ちをさりひらきて生駒山の方へ落行ける

道犬が奸計の子細とたづぬるに偽筆の達人とたのみ銀杏の前の手跡と見せて偽扇書と
かゝしめ一味のものをしてかねて庭中埋めおきけるとさゝつ
山三郎姫とせおひておち行生駒山の麓の辻堂よあゐて危難よあふことつぎの巻と讀得
てあるべし

○ 辻堂の危難

かくて山三郎の銀杏の前とせおひ生駒山と越て河内の國よあちもろんと東の麓竹林寺ちり
きわふりまで逃かりけるよ達人とも明松をふりてらし近々とおひつきければ姫君よあやま

ちあらんことをふそれ傍の辻堂のうちにゐるしかきて引返し退人の大勢も向ひ合せて
戦ひけるが退人ども山三郎が猛勢もふそれ秋の木の葉の散ごとく四方も亂れて退去ぬ山
三郎今の心安しと辻堂もかへりて見ればこのいかゞ銀杏の前のかはさる月の光りよよく見
れば堂上の塵のなかま足のあとあり扱ひ退人の討ごとよて我戦ふひまも姫君と奪ひ去つる
よ疑ひなし姫君と奪れてなま面目よすがらふべきと心を決し刀をとりなはしてはどく腹
よつさふてんとしたる折しも僕の鹿鹿總身朱も染りながら走來たり此体と見ていそがはし
くかしどやめ大恩つきて不被伴左衛門徳野豐藏兼扇三平十子泥助犬上八等四人の者をう
さらひ草履打の宿恨により人たぐへよて三郎左門と打たる子細を涙ながら物語りけれ
ば山三郎大は驚き且怒り目悲しみ涙流のごとくはふりかちて去をし詞もいでざりけり哀わ
りていひけるの今日いろいろある悪日ぞおん節の騒動といひ姫君を奪ひとられまかのまなら
ず伴左衛門某と打んとて誤りて親人を打たること思へば某が手を下して親人を打たるも同
然死も死かれぬ今夜の仕義なり一ツよの姫君ととりもどして奸臣等を亡し若君とより立て
ば家督としニツよの伴左衛門等五人の者を打とりて父の靈前も手向冥途の恨とはらさせや

さでの忠孝の道全りらず今のニツも三ツもはしき命あるぞやさるよても親人の亡骸をもと
めせめてかりの葬りせん彼所へ案内せよ鹿藏とてそでよ立出んとまざる所よ此邊の百姓
等とおろしく明松を前またて戸板のうへよ屍をのせ箒打りてかゝげつゝ見ればよしあり
げなる武士方と見ゆるがむごさらまら殺されざる事よ衣服大小懐中物提物などそのまゝよ
あれは盗人の仕業ともおぼえを片時もはやく郡司よ少しきこえて我々があやまりよあらぬ
様いそげつゝと口々よいひて來りぬ山三郎立より此方よ思ひあざる事あればその死骸見せ
くれよといひつゝ箒をとりて見ればむざんや三郎左衛門身跡す々よまざりまされ脇腹より五臟
六腑みだれ出て鮮血戸板よあがれけり山三郎ひと目見るより悲歎の涙よむせびかへり地上
よ嘯とたふれ伏す鹿藏百姓等よむらひ此屍の當國佐々木殿の肉内三郎左衛門といふ人な
りこれあるの則その子息なれば此死骸此方へ渡すべし少も汝等が越度よなるとよあらざと
いひければ百姓ども死骸の衣服の紋所とおあじ三本傘なることとてさては相違あるまじと安
心し郡司の前に持出んよりこゝよて事とをまさん我々仕合ありと納得し死骸を渡して
たらうへりぬかくて山三郎きげきてかへらぬことなれば鹿藏よあむりの清水を汲とらせて

屍を清め後日改葬するまでの權くこゝまかくすべしと辻堂の板敷をどりのけて床の下を深く掘屍を埋てもとの如くなしおき香爐の灰とすて、水と手向木尊の石佛まじかひ南无寶珠地藏菩薩惡趣の苦患と救ひ玉へと念じつゝなほも涙のとゞまらま此時三郎左衛門がおびたる刀の重代の左文字の刀二千五百貫の折組つきさるる名作なりしがせめてのかたこと取かさめ懐中物提物とゝもみ鹿藏又持しめければ鹿藏いひけるの弟猿次郎事仕と辭て後河内の國又白ひえバ一旦彼地おはん越あるべしといふ處へ三郎左衛門が乗馬いつさんに馳來り山三郎が前又頭をたれて涙をながしければ山三郎その爲体と見て胸ふさがり汝親人の秘藏ほどあり我居る所をまゝひ來て愁怆の体人よもまざりしふるまひなりとて鬨とかけ撫つゝいひけるの昔典の孫堅董卓と戰ひて利と失ひ馬より落て草中へ臥衆軍分散してその存所をまらお然るよかの馬營中よかへり軍人をみちびき草中よいたりて孫堅と扶えめしと聞汝はそれにもまざりしぞといひければ鹿藏も落涙し畜類そら主人の恩と思ひてうくのこくとく愁ひ悲む人と生れて洪恩を思はざらんや伴左衛門等たとへ天よ道ありて登り地又門ありて入とも某が一念の誠を以て解ぬ出しの本懐ととげさせやまべしとてかの馬の平頭をなでまはし人と畜類のへぶていわれども我も汝も傍輩よて主君の恩をかふなりしに同然なるに我の汝みのおとりしぞ飢いせぬり飢さらんとてあぶりの草ととりて與へ水かひなどしていさはりけり山三郎幸の父が片身の此馬これ又乗じて落ゆかんといひてひらりとこのれバ鹿藏あぶりの枯枝をひろひとり火打袋をとり出し火を點じて明松とし前またちて生駒山よさしかゝり名よおへる暗々峠の難所もかねて案内とまりたれば口綱をとり馬とみちびきて河内の國へぞいとまゆきぬ

○夢幻の落葉

それいさておき爰よまゝ六字南無右工門の佐々木の節の事氣づういしく旅商人よ身と扮し一荷の荷物をかさげ人目とはまかり笠ふらうとと面をおはひて大和の國よいさりけるが宿をもとめおかくれて夜よ入額田部村とそぎて柏木の森の邊を通りけるよ木蔭よ人のうめく聲いと苦しげよきこえければいふかりつゝ立より提灯とさしつけて見るよよしわりげある女のむら鹿子の小袖の裾とたらくくゞげたすきひきゆひけましく打扮たるが黒髪をふり亂し敷所痛手とおひ鮮血まゝたりなぐれて總身赤よ染りうつよしよ伏て思もたえまゝなり傍

よある長刀を見れば銀の蛭巻して梨地は備無目結の紋とちらしは時ぬこれ佐々木家の紋か
れバ益いぶり女を抱き起して顔を見ればこいいうは月若の乳母柏木ありあむ右工門入
は驚きたくとへの氣つけ薬をど與へてさまは介抱ければやうく目とひらきかん身の
佐々良三郎どのにあらせやといふあむ右衛門曰かん身いりある事よてかく袖手とかひ
此所いふふれ居たもふぞそのもろくわしく語りはへといふ柏木苦み思とつ兄今宵かん
館の騒動まうくの事よて姫君若君の命危うきよより姫君の名古屋山三郎守護してか
ち行妾の若君を扶けやして立のきつるは途中よて退手の大勢よとりくこまればどく苦君
と奪ひとられんとまつるゆゑ命かぎり又戦ひやうく追人と斬散して若君の身跡なく此
までの落のびつるが心の矢猛ははやれともあまの深手よ歩行かきはせ爰又倒れて夢中よ
かりかん身の介抱あわづりしもまらせかん身先は藤浪を殺して立のかれし事實の若殿放
埒の思とたんと忠義の爲よせられしよしかん内方磯菜どのよりの消息よて始めてまりか
ねて姫君若君もかん身の誠心よきこへあけて折もあらば飯参をと思ひしうひあく此度の
大變なりさうながらこゝにてかん身よむひたるいひまわう君の是處なる所あり此處

手よていとてもかなはぬ命かれは何とぞかん身若君とかくまひやし再世よいざしまひらせ
玉はれかしと泣やものささるうちもいと苦しげにあむ右衛門委細と聞て十分は驚き然て若
君いづくよおはせると問れて柏木あさりと見まはし月若のおはさぬをみて仰天しがつ
くりとあち入て所の名さへ柏木の森の東ときへうせぬかゝる折しも茂林のうちより退人の
人敷若君の口は猿轡をりけ小脇よかひこきて走り出やよく佐々良三郎汝長谷部雲六と
いひ合せ百璧の巻物を奪ひ藤浪を害して逃去りする大罪人こゝにて見つけさる天の與へ
なり若君を奪ひさるうへは汝を誦ふれば兩の手よ美食と握るが如しとくく手とつらねて
いましめをうけよ若手むかひなどせば忽ち若君をさし殺せを返答いりよとよばれはあむ
右衛門いそがはしく地上よひさまづき此所よてかん身等の目よかゝりしは某が運命の尽
なりいかでか手むらひいさせべきいとく繩とかけられよといひつゝ手とつらぬれば退手
の人敷くちよもさそがの三太郎覺悟の体殊勝なりとて己は繩とかけんとしたる油断を見
そましまむ右衛門つと立よりて一人と聞割し若君を奪ひかへして背後よかこひ仁士ぶちよ
立たるのこゝちよき形勢なり退人の人敷これと見て欺かれさる目としさよそれ打とれと叫

とりつゝ刀末をろへて斬りけさりさむ右衛門手はやく思はれ仕こきたる刀を振て相ひかひ
そきまもなく斬つれば遣人の大勢散しぐさく春雷小打るゝ初驟のごとく身とを以めてを
逃去ぬむ右衛門今心安しと若君の前よりひざまつき人目といひいへば此邊を立のく間
まどしのはどいおん氣づまりよいははさんぐ此うちよん身とをのびくさるべしとて月
若と荷物のうちよ抱き入柏木が屍のわさり近き流れも沈めて氷凍し又も遣人の來ぬ間よと
足をはやめて走り去丹波を斥てかへりぬ

○ 斷絛の琵琶

さても六字南無右衛門の若君を救ひて我家へ降り一間のうちよまのむせかき娘とくもあ
朝夕心ともちひてかしつき權月日をおくりけるが一日若君よしとし氣をらしさせずさんと
楓まつしつけいざなはそれば煩しや月若の世ようつくしき生れあるは妖鼠の爲も髪も毛と
くひ尽され鬚の姿となり頭も似合ぬ振袖の絛の小袖の模様さへゆたのさゆたの拾小舟薄
標の奴粉も涙の痕のまことなり身をばらしげふ出玉ふさむ右衛門楓も命じて柴の折戸とか
うめらせ若君と上坐とぞえてすしけるは秋き一間のおん懸家ぞおん氣づまりとい存なが

楓のことし十六才姿まをく美態よと手細木綿の振袖も地羅もまかせ風情なるが母のをば
み近くより長くの毳在京若勞となされんぞわけくれ氣づうひくらせしが恙なき体を見て
やうく心やをまりしといひければいなく我苦勞よりおことが事妖蛇も今ふ去らぬよし
其身と以て父上小孝行尽す辛勞をさぞかしと推量しわうれて居ても片時もわゆるゝ事いあ
りしぞや縫物髪もよく仕おぼへつるよし父上の消息にてとく聞ぬとてうしろむかせ髪
かへりどつらく見まはしさてもらうつくしうよくで死しぞ此さるものもおことが穢しかあ
つばれの手まはぞ廣き都のうちにそらふことが如き娘のまれと思へばいと妖蛇の事あり
ひいとして不便なりと何につけても子とおもふ親の心をやるせなき真ありてあむ右衛門佐
々木の籠の騒動柏木が忠死の子細若君をかくまひかく事の秘末と語りさうせければ御來
とろよ不慮の毳難義いたはしさよとて泣ければあむ右衛門いかほど云ともかへらぬ事とち
も文彌も久しよりよて若君よかん目見へつりまつれとて楓とつけて奥の一間よいざかはせ
くろきの念珠つまぐりて例の念佛をとなへつゝはるうに時刻とうつしけり日むしも漸々か
たたく頃京下りの古書畫の商人いそがはしげみとしり來て前の目見せまうしつる金風が白

蟹の繪巻物外は望人のできしゆる唯今價と相渡しなれば望の方へやらねばならぬとい
かぼせやらんといふるむ右衛門打聞てそのあまり火急なりせめて三日まぢ玉はれかしとい
へば商人頭と打ふり某も旅ダげの事なれば三日あどのまされゆき走玄からバ今夜三更の時
までまぢゆさんその期ダせられたまぢりの方へ賣つかけしゆどとて詞とつぐひて立版
るほどなく外の方より人聲して足音ひびきければ何事あらめといふる間もなく村長も案内
させて捕手の輩組子どもとや〜と入來る組子の頭黒星平といふ者首桶と小籠もさづさ
へ聲あらゝかよいひけるは汝佐々良三郎今の名は六字南無右衛門とやらんいふよし月若
どのとかくまひかく事社進の者ありて大殿のおん耳にいり首打てまわれとの嚴命なり汝自
ら打て渡すべきや某直も打べきや返答いりよとよむりぬかむ右衛門胸と〜ろくといへ
どもさあらぬ体をなし若君とくまひゆせしかんど、い何者ゆしけるや夢も走らざる
事なりとそらうそぶきていひければ眼平から〜と打笑ひ汝かくまひかく事明白なりと
てあらがひ、此あむら家と踏破りて家さがしせんもし又尋常も首打て渡さばその功より
汝が驚恐のゆるとべし返答より汝もともわからぬととりて藤波と殺し物を奪たる驚恐で
た〜を〜しとはたし〜く〜せめければ〜をダのむむ右衛門もほど〜驚恐の体なりしか
魂をえて云けるのさむかり事のあらはるゝうへいせんそべなしいたはしなから若君のおん
首打て渡しゆさんさりながらせめては最期の念佛をそ〜めゆをその間まをしのは猶豫くど
されかしといへば眼平うあづき得心のうへいまをしの間のまぢくれんまからバ今宵三更の
時打鐘を號として首うけとりよむかえんすればかあらす詞たがふべから走且るれまでの村
長かまぢまぢららん首桶をそれへうりとりとるべしとて相渡し人数を引具しかへりけり跡まひ
とりかむ右衛門手をこまぬき頭とたれてまをし思案よくれけるが真ありていひけるは
の價百兩といふ大金あればとても調べき手段のなけれど一寸のひればひるのびるとい
ふ常言もあればもしよき思案もあらんかと今日翌といひのべしダそれよりもなほ危険なる
の若君の身なり今宵よせまる二ツの難義臥竜楠氏の智謀ありともものぐるゝ道調をべい
あるべから走藤波が所縁の者も打れんとかねて思ひし命あれどもうゝるさはよの是非もな
し若君と負まるらせのがるゝさけいのたれ見て若かなはざるこの時の腹を〜めゆし斬
死するより外なしといとち心のうちよりさづきて舊高龍のうちより一服を取出し行

灯籠て奥の一間よ立いらんと破れ紙門とさどわくれバ盲兒の文彌出布のうちよりわたの
小判を取いざして手探りよりぞへ居たるが紙門のわく音よおどつき手むやく背後よかくし
たりおむ右衛門目むやく見つけていぶうりつゝいひけるいいうよ文彌見れば餘程の金を持
たるがいかなるゆゑよての金持しをこへ出して見せよといふ文彌いやくこれの師匠よ
りあづりたる金おれバ親人なりとも見せがたしといふよおむ右衛門師匠なりとも幼年
の汝お大金をわづけおくべきいはれなしいうなるゆゑよてあづりしと問れて文彌口ごも
りいやこれの途中よて拾ひし金なりあづかりしよいあらまそと詞のわとさきそこはねバおむ
右衛門まをくわやしみ途中よてひらひしものぞかくしかくい道よあらずいづくよて拾ひ
つるみ實正いべととひつめられてせんをばなくまこと此金あづかりも拾ひもせず道中の
旅店やよとまり合せし旅人の金を奪とりつるにていと聞ておむ右衛門おきれはてありくび
つかみて引たふしなよといふぞをいまことう異實か元來おんち孝子よてさわる非違をわこ
なふべき性質よあらずと今のいまよで思しが存京のはづかの問よさむかり心のうはるもの
かこれよくさげよあたらなる所よハ王法ありくらも所よハ神靈あり五戒のうちもこも

偷盜をおもしとせれとへ感一すちよても盜をなして世よく罰をまぬかれんやけならはしき
心慮やあさましき所存やして左の手よより首を持かへ右のこぶしよよりあげて頭よのぞこ
つゝけ打よ打さふし且怒且悲みわつき涙をおとしつゝかやうよきびしくいましめなばも
しくハ心もなほらんかと親の慈非こそせつおけれ文彌のやがて起上りわぎと笑ひていひけ
るハ貧乏者の子とうまれ正直よがまへていとも出世いなりたし此金よて官ととれバ一
生の安樂なりさむり阿玉ひぞとさけバさくはどにくけれバ齒をうみならして聲をあら
け大膽不敵の今のことバさらく子といおもはれず天眞彼句の所行あり親子の恩愛ふれま
でなり七生までの勘當としくいづりふもいでもけとて足をわけて踢とせせバ文彌ハ出布
を懐中し勘當うくれバ親でなし子よあらねバ長居ハ無益とつふやさつゝわたりて探りてい
でんとおむ右衛門怒りよまのひき走りよりて又踢たふせバおさわがりて又悪口をればな
や踢さふし踢たふせバ益悪口やますおむ右衛門いよく怒頭肚の用捨かく踏つけく
ふみたふせバ文彌ハ片息おなりながらおはも悪口といまらされバおむ右衛門怒氣天よさう
のぼり刀を走らりと扱手も見せず肩尖四五すさりこめバ呀と一聲たまきりてうつふしおた

ふれりたゞみかけてきらんとせしが思愛手そぢの萬龍の緒星よまといひて背後のかたへひ
きもとさるゝごころをると思ひきりて又ふりわぐる劍の下よ妻いそはしり出やれまをし
まら玉へいふことありとどゞむればあむ右衛門いやとゞむるなかりくゝよ生かきて罪つく
らせんよりの一思ひよ手よかゝる親の慈悲ぞといひのゝいそ榮とおしのけつきのけてなは
きりつけんと立まはる磯榮の夫の手よもぐりその身とまづりよひきもとし思どつくくゝま
の金の盜物よいはままことの娘の楓が身の代にていといへどもあむ右衛門合點せず妖蛇
よ見こまれ片輪な娘と何のゑよ大金出してかゝるべき汝もどもよいつはるうとしておらみの
くれバ磯榮奥の方よ打向ひやよく娘こゝへ来て父上よおことが心感ものがこれ早くく
とよばゝれば娘楓一聲答てかけ出しが文彌がきられし体を見てむせかへりてぞ倒れける
磯榮文彌を抱かゝへ苦しうあらんが父上よ本心をかさるうち地てくれよといこはりのゝ
お向ひ悲しきいらべあれども委細の譯と父上よとくく告よと言れてやうく顔とわけ
む右衛門よ打向ひ非不審の理なり前の日父上は物語にかねて尋る百蟹の巻物思かけき京
りの商人持参せしが其商人と捕出所を亂さば盗人の任所もそれ巻物も手よ入道理と思へ

口舌の身のりあしどりわらひる事ななくしかとさどりして假の百兩といふ大金あれはと
も我手よいりかとし我手よいらねバ未代盜賊の汚名とそゞ事わたはず金づくみてこれず
てみだきし武士道とせて先祖の名までをけがすゑと思へいゝ無念なり口おしとよとて里
なきよあき玉ひしが骨身よまていさいしく何とを金とゝのへてわけんと思へど外は仕
らもかし幸京都五條坂の傾城屋篠村八幡の門前よ旅宿して居と向ひそらませりて此身
を百兩よ買くれよとたのめしうばまみやうにうけがひしが妖蛇のいそれを聞もその徳被
みおよ大金がほしいと思ふ心一圓よ我身の片輪よ心つりきりし事よとみづりらはち思ひつ
ゝすゞくかへらんとあつるよ捨る神われバすくゝる神もありと云常言のどとく今ひとり
の年うさがる傾城屋がやすおのれこれまで蛇つりひの女さまとありしが實の因果よてさる
ことあるのめづらしく殊更生れつきもよければ組川原よて見せものよせばあらびるまよ
りかへりて利得おはからんもし見せものよなる心わらば五年とかきり百兩よかゝるべしと
やまよより見せものよあろりたどへ生皮とはがれ生肌とぞらるゝとも百兩の金とぞゝのへ
父上の汚名さへせゝげバ罪せりりもいとふべからずことさら面いさらせともうる川竹のあ

がれをくも身をけがせにいましからめ諸人又はぞとさらしあべかへりて罪障のさえりせあ
んよそがともならんうと心を決しそれよきのめでもどりしが父上おのいひだしわねて居つ
るよ今日思はずも母さまのおんかへりと幸ひとし妾が心腹をうちあけさきはど裏口よりと
もあひいで、かしこよもき母さまの手形とそへて證書と渡し百兩の金どうけとり今夜の
うち小都へ旅立はづよ約してりへりし折くら捕手の騒動若君の忠急難母さまともものかけよ
て唯あされてをりい不審のあさせ玉ひどとよ文彌が持しかの金の代もちがひきく
いと泣々かたるにぞあむ右衛門一つの不審のはれされどもそれと文彌が口をりら盗しとい
あどいひしと血刀とあげせて、どひかくるいを業かはりていひけるい若君の忠急難をきく
とひとしく文彌をおん身がはりと思ひつきしが忠義は凝るおん身おれどもさせが親子の
愛着よてもし心もおくれ玉のんうと文彌にいひふくめ父上の氣質塵をくりもゆかめる事を
さらひ玉へ此金を盗しといひ悪口せば怒りよ乗じて恩愛の細とたち手打し玉のんり必定
へ去りとはからふべしと心づよくもいひさけさればそみやうよ聞とけ某宿世の因果
よて盲目とありつればその主君のは大事といふとも戰場のはさらさかりがたく武士の子と

うまれさるかひあしと日來くちとしく思ひつるに若君のおん身がはりとあるに戰場の打死
も同然ねがふてもあき幸へさりあがらたとへ計にもあれ親もむかひて悪口し盗せしあ
どの勿体なくてやしさがさしこれむうりのゆるし玉へといひけるゆえその最のことあれど
もさあきての父うへの愛念を絶ことあさの老何事もみあ忠義の爲どとてやうく得心させ
つるにけあげにもよくはからひしどほめつうのされくぶさるべしさきはどものかけにてお
ん身の様子をうかひしよ若君をともあひてのぐれ出うあわい時のきり死と覺悟の体も見
へたれども村の口々山道まで捕手の人数かさめ居るよし聞ければとてものがる、道いな
しきり首となり臉をふさぐを言目目あきの差別もあらじたとへ眠平若君のおん顔と見知る
とも忠義の一心を以てあさむうバ仕換じいまし大丈夫のおん身をへ恩愛もひきされてお
ぼつうあしと思ふものを恩智あ女の心といひ朝夕はあれず手あはしかけてこれまであ育
げさるいとし子をそめて殺さそ胸のうち御推量くぶされうしまうのミから老娘様まバ
しのわうれといひあがら世の中の親のあさけの親子の片輪をどこまでもかくしてやるが常
あるよ諸人お顔をさらさせて丹波の國の因果娘とのちく、までもはぢを獲さそ不便さよ愛

ガ身せめて十年とし若くバ此身を賣ても娘にうき目の見せまじものととどきたて〜兄弟ふさりの手をととりつゝ夫ふおくれととらせじとたへまのびつるため涙腺の堤をかきさりてあふれおつるぞことわりあるまむ右衛門始終と聞うさびはるれば百倍かましく鉄石の如き心も肝もやさかねさゝるゝ思ひ五臟六腑惱亂しまはし詞もいでざりしがやゝありていひけるの文彌事若君と同年といひ剃髪ていしはつの姿といひ顔うさちも似たるゆゑおん身がわりと思ひつきての見しうども何いふも盲目めくらにて用いたゝすと一圖ひとも思ひて死者しやくしのまぶさをもさぎ盲目めくらめわきのへだてあき所ところのつゆをくりも心づりざりし欄らんも容ゆるみそぐれされども片輪かたわかれバ身うりもあら老嗚呼おのふさりの子ども持もちながら親おやの因果いんぐわが子こ報忠義ほうちゅうぎの用にたゝざる事ことよと残念ぜんんも思ひしがおこととはじめ兄弟きょうだいの子こどもらたぐひまれなる心慮しんりょを保持もつべきものの子あるぞやといひて涙と血と相和あひわかして瀧たきのごとくに流しけり文彌ぶんみの母ははの介抱けいぼよてやう〜と起おこきはりかとかしやうに手につきていひけるの濁かしても盗泉とうせんの水みづを飲のみずとやらんきくものを母ははうへのおはせといひおがら盗ぬすぬ金かねと盗ぬすしと親おやといつはる詞ことばの罪つみおんゆるしくとされうし果報くわはうつゝかくて生うまれもつゝぬ盲目めくらとなりぬればせめて縁道えんどうをばげミ父母ちち、はは老後らうごの心こころと安やすめ片輪かたわお奴やつも不便びへんをくはへ玉たまひは養育やしよくくたされし大恩たいおんをむくはんものとそれたのしみに四年よねんこのりの精神せいしんをこらせしが此度このたび若君わかしんに一命いちめいをさてまつり姉あねうへも身みと賣玉うりたまへバ此末このしるのさぞ心こころぼそくおぼされん生いわかれ死しわかれと兄弟きょうだい二道にだうにわかれども死しの一旦いつたんにしてあし安やすく生いて諸人しよじんに面おもてをさらし父ちちの汚名おとがなをそゝがんとおぼしめを姉あねうへへの心こころ慮りょの又またあしがさき孝行かうぎやう之これ此年このし來學きらいがくひ得えし琵琶ひばの一手ひとてを父ちちうへに聞きせサさで死しるの心こころ残りのこりにいへバかく手てと負おのておぼつりかくいへべれども一曲いつくわつつりふまつりいへし冥土めいどの旅たびのふき土産みやげもさかふみとおぼされておん聞きくごされうし母人ははじんさまその琵琶ひばこゝへといふよぞいそ榮えい花はな々々琵琶ひばどりいだしてわたふればわづり又年としの十一才じふいちさいの盲兒めくらご々々標木ひょうぼく綿わたの肩かたわけふ血ちしはふゝゝる疵きず口のいささところへて琵琶ひばうきあらしいと苦くるしげふ離はなれて平家へいけとぞかゝりける

さるほどよ一の谷いちのやの軍いんぐんやふれしかバ武藏むさしの圖との住人ぢゆうじん熊谷くまがやの次郎直實じじろちかみ平家へいけの公達こうたつたもけ船ふねのらんとしてみぎののかさへあちゆき玉たまふらんあつばれよき大將軍だいしやうぐんよくまばやと思おもひほそ道みちよかゝつてみぎののくさへあもまする所ところよこゝにねりぬき又體たいぬふゝる直垂ちかえよ甫賣ふばいの體たい若わく若わく形かたち打うちたる甲かぶつの緒いととまめ黄金おうごん作しやくの太刀たちをばき二十四じふにさいふ

るきりうの矢おひ頻藤の弓もち運鏡なる馬も金覆輪の鞍おいてのつさりける者一
騎沖ある船と目よかけ海へさつと打入五六たん心かりおよげせける

とうたふ唱歌も聲くもりひくてもふるへてたしうからねどさそが日來の手練といひ此世の
かざりと思ふうら苦しき息をはげませつゝ三重の甲をわけ初重の乙も收てうふひそまし
りけれの大絃の嘈々として急雨のごとく小絃の切々として私語のごとく昭君馬上よ去らべ
樂天容舟も聞つるよもはるうにまさりて哀ありなむ右衛門耳をそバだて、聞居たるが思愛
切なる歎のうへまうゝるくなしき調をきけば皮肉もはなるゝこゝちしてこらへりねてぞ泣
伏ける葦葉楓ももろとも涙よむせふバくりなり文彌のきはも聲ふりたて

熊谷なみだとはらくとあがいてわれ御覽いへいうよもしてたせけまゐらせんどの
存いへども味方の軍兵うんかのごとくをちゝてよものかしまゐらせいむあわれ
おきじうの直實が手よかけ奉りて後の御孝養をもつりまつりいんどやけれバ只何
様ももとうゝ首ととれとぞのさまひけるくまがへあまりよいととしくていづくも
刀と立てしともおぼえす目もくれ心もさえてはて、前後ふかくよいはえけれともさて

しもわるべきことならぬいなくゝ首とぞかいてける

とうたふ聲さへまだぬよよいりやどゝたえん琵琶の緒よかゝる血しほの疵口よりさるとあ
がるればあな苦しやもはやうたふことうなひがさしこれまで予とて琵琶をかき此世からさ
へ一條の杖をたよりの暗室死出の旅路の殊更に黒闇地獄も迷行無目の餓鬼と生れ出て呵
責をうけんい必定なりそれを不便とおぼすなら末期の水をさかまさま逆縁ながらおてづ
ら香花を手向たまはれうし我身のための功德も他人の千僧供養よりはるうにまさりいべ
しさらぬぬに親子の一世のちざりととさくに盲目のかあしさい父上母上千万年のお勤をさて
冥途へおはす事ありともお顔を見る事かあひじとこれが三世のわかれ又あふこといあらじ
と思へばいとかなしくおごりおし父うへいどこにおはすぞといひつゝはひよりておむ右
衛門にとりそがり身うちと探りつ撫まのしつに苦勞となさるゝ故ういかうやつれが見えは
べるかならずわづらひ玉ふなよどかくおん身慈かく善長くおはしませと今般のきはまで
孝心のふりさ詞とさくよあはなむ右衛門助ふさがり主君の先途見せ、けて后の崩波が縁
者とたづね恨みの刀よかへりて死をべきうねての覺悟なれば思へば断絶の一期もて切をも

去らぬこの身なるに夫とこそしもまらずして長生せよといとおしのいひごとよと心よ
の思ひながら口よいはいはず過去の修因今生の現果つふなかりける我うなどのみ言てどか
く涙にむせびけり磯菜楓兩人の文彌が左右まどりつきてこれが三世のわりれうと聲もふし
ます泣ければ文彌のふさうが身うちをさぐりせめての事にたゞ一目おん顔を見て死たさこ
どぞ盲目とありし何の因果と今更にかき口説て血を吐心かり泣けるが折しも空に時鳥一
聲鳴て過るよぞ死出のたどさの遺えるべきが苦痛をせんよりの少も早く父上のおん手よ
かゝるよまくなしと西にむくひて合掌しま心らく念佛とどなへつゝいざ／＼と催促し首さ
しのべて待ければなむ右衛門子にはげまされく身を起し刀を抜きめやがと彼も寸刻々け
るが前々斬し怒の刀今の刀の恩愛の切ある思ひの剣なれば手も抖き脚も軟きていづくに
劍と打べしとも覺す今聞つる琵琶の唱歌熊谷の次郎の敵でさへ致盛を打兼つるものと現在
我子を斬思ひいりてう堪忍べきと前後不覺の体なりしが時刻うつりてま損じさば彼が忠死
も水の泡と思ひさきり／＼よろめく足を踏しめつゝ若我成佛十方世界念佛衆生攝取不捨南無
阿彌陀佛の聲と諸共にばつしと斬り無漸やな首の前まさるひもも腫れし／＼しるよたふれり

○修羅の太鼓

磯菜楓の太刀音と共にさけびて打ふしぬ折しも遠寺の鐘の聲之や三更の時かれバ猶豫から
走と立よりてかの金をとりおさめ手バやく軀を葛籠よかくし泣伏妻を引おこし泣て居る處
よあらず此金持て裏道よりかの巻物を買取來れ娘の今宵生別えバしもなごりとおしむべし
どて鮮血まゝる首たづさへ兩人をひきさつてつゝへだての紙門をさてさりてその後音もあ
かりけり約束の時刻ぞと黒星眼平手の者をぬて來りやよくあむ右衛門若君の首打しうい
かよくとよべられバ一間のうちよりあむ右衛門首桶をたづさへて打まはれつゝあゆと出
嚴命もだしがさくいふのしあがらん首打ひぬいさし點檢とさし出せの眼平はいはく某
月若どのをよく見まじる事のかねて知るおんぢあられバよも備首のわすすまじもし又す
こしもいつのらバ忽おんじが身のうへありとよらみつゝ首桶と引よせて已ま蓋とどらん
とすあむ右衛門の若假首と見あらはさばきり死すべき覺悟もて袖の下より刀を抜きけかさづ
をのこてひかへしいげに危くを見えふりける眼平蓋とどりのけてこれのとおどろく休あり
しが文彌が首の口中より陰氣を吐とあむ右衛門が目にはのを見へしが眼平忽眼くらみいか

むも月甚どの、おん首も相違おしよく打つるぞと賞美して首桶をとりおさめ徒者どちがづ
 けとはまきの人数をどくくひかすべしと下知とあしふと、びあむ右衛門よむかひ若君の
 首打たるうへい汝もおぬてかまひあし責悪の罪われども此度の功により大殿の御前よきま
 とりあしつかひすべしといひ捨て人数を引つれ立かへるあむ右衛門爲恩を吻とつて足ともは
 まきの人数と引バもはや氣づかふ事あし若君をあとしまゐらす支度せバやと思ひつゝ立上
 る折しも妻いそ菜思もつさわへずとせ飯り樓子のいかにしたづぬれば文彌が一念頭よど
 まり陰氣を吐て眼平が眼とくらませ十分にて欺きしとき、ていそ菜の必あちつきかの巻物を
 とり出してわらせバあむ右衛門ひらきまてお家の重責よまきれあしして先おさめこれと
 わればそれがしが汚る名をそゝき末代までもきよかるべしこれといふも楓が孝心よかき
 ゆゑ娘のものはや旅立しかあぢ不便やさずかあしからん今思へバかれと悪とあづけしもか
 へでの藝手の略訓よて小蛇のたゝる前妻あらん文彌が初名を栗木郎と名づけしも丹波の國
 の爺打栗爺よ打るゝ因縁り只此うへい文彌めが菩提をいふが肝要あり眼平一度假首とど
 めれしが今もこれとわらひれてふくゝびこゝるよせ來らんゝ必定あり片時もはやし若君と

あとしやすふまかじといひて見入月若の手をさづらへて立ひつれば若君の目と泣はらし
 夫婦の忠節過分あり便あき文彌が身のはてやとあけきのうまよ一言が世よあるときの千
 より夫婦が身よありがさくあむ右衛門巻物と懐中し軀といれさる葛籠とせあむ若君の
 ん手ととれば妻のいそ菜琵琶といだき地水火風の四つの結のされし我子のかさどと
 手撥面半月の月の光りとたよりよて播磨のかさべでおちゆさける

○かくてあむ右衛門夫婦若君を扶て播磨より河内よいさり所縁の寺またよりて文彌が
 軀と煙とあしかさとの琵琶を巻物として佛事といとあむ若君いそ菜とつけてかの寺
 に忍バせあきその身いかの巻物をたづさへ桂之助銀杏の前の行方を尋ねに出けるどど
 さても銀杏の前の山三郎よ扶られて生駒山の麓までおちのびしが辻堂よて追手の者よ捕へ
 られ不破道夫が手にわたりて蜘蛛手方の深殿おくまりたる一間のうちよ押籠られて日の暮だ
 む見ることあたはず月若の身のうへ苦よあるうへも朝夕の食事だもろくくも興へされバ
 必氣日々よおとろへ身体夜々よやせほそりて命も危く見文玉よあかのみから生道大御手の
 方と密談して大殿判官の命といつはりいてふの前と引いだして兩人かゝるゝ真夜九へま

かく寤現責よして月若のゆくへ白狀せよと責よけりむざんや幸いてふの前日三日三夜のう
 つせめもつかればておる之をねふれい道犬耳のはたに大鼓をあらしてねふりをさませ
 去バしのうちもねぶらさす夢幻の世の中夢も見せぬを哀ある道犬眼をいからしいかにい
 てふの前どの月若どのゆくへまらぬ事いよもわらじとくく白狀しめされよ大殿の嚴命
 さればとてものがれぬ處ぞと責とへバいてふの前臉おもげよ目をひらきて苦しげよ思とつ
 きかくやそとあき責よわひ夜とも晝ともおもはえを夢か現か寐てか醒てかわかさざるこ
 ちすればいかばかりいとをしと思ふ我子よてもわりかさへるあらばうつゝのうちにいは
 でやいいかでかつゝみかくさるべき推量してよ道犬とのさまひつゝも又ねふれば又太鼓を
 打て目をさまさすねふれば打うてバ醒水責火責よわふよりもはるかよまさる責苦あり傍よ
 り蜘蛛の方小膝とすゝめてちかくよりいまだわづかよ三日三夜の責さればまこと現いれさ
 らぬとおほしあがき責とうけんよりつひ一言白狀せよ此うへよもいはすい骨とひしき肉と
 さまてもいひさでやいあるべきいのでいで答へよとて角さき夜月のさまあしてくらひつ
 くへさす勢ありいてふの前顔とわけのいはとにのふまふともあらぬといせんすべし只此

たせ月月の光りのあきらかかれどもいづくいかある所とあらす松吹風ハ梢をあらし谷の水
 音耳よひひきてものそさましくきこゆればこいまだ夢のうちあるかと更うたがひはれさ
 りけり眼平むかひ合ていひけるいにかふいてふの前どの此所ハ名よおへる岩倉谷といふ所
 之大殿の嚴命よよりて唯今おん首を打ち念佛まうしたくおぼさばとくくやされよと情
 あげよぞやけるいてふの前これと聞さてい我身も今かぎりなるか捕へられざるその時より
 覺悟のうへの命おれればおどろくべきあわらざれども今般のきいよ唯一日月若を見ざるのみ
 此世の心のこりやかしとてさめととぞあげかるゝたどへ鉄もて鑄かしたる人土もてつく
 りたる的なりともすこし哀れどもよほそべきよ物のあわれをわきまへざる奥こゝろの眼
 平さればあげきと耳にも聞入す氷をす刀と板左りの方よりふみこみて已まかうよと見えた
 る處よはるかむかふの茂林のうちより啼的一聲ひきわたりてたちまち鉄丸飛來も眼平が
 胸板と打ぬきければ血を吐ながらさかしまにひるがへりふそほりかへりて死てげり下都等
 の魂天外飛去つゝかうべをおさへて逃去ぬまばしありて林のうちより忍痛申し面とつ
 へと黒丸裝束をたる者手火の具をたづさへて態々とあゆみいで驚き臥たるいてふの前

を引ひこし小島ははさみていづくともかく走ゆきけり是善人か悪人かはた敵か味方か何人
といふことを知らず此の姓名をえらんと要せば卷之五の下冊第十九回を讀んで知べし

○靈場の荒間

その頃近江の國石山寺の觀音菩薩結縁のため開帳ありけるが名よおへる靈場なればこれよ
まうで来る人士女老少群集し絲々絡繹としてゆきまばらくもたえず誠是行川の音がれ
のどいまらざるも似たり商人どもかゝるよぎひよ乗じて過分の福を得んと俄は御屋とつ
くり草津鞭守山鞍高宮布長濱糸大津針高島硯武佐墨水口等辻村のたぐひ玄惠法印が庵の
訓ももらせるものまでおのがさまも持はこびて山のごとくつみわぐれば買人の雲の如く
まあつまりぬあるひ酒賣家あり餅菓賣軒あり憩所をつくりて茶とひさく者あり小町の
射場まうけていと香ととする者ありあるひ長剣と撫して藝をうり今様をうたひて錢を乞
聞もつゝへぬ片輪者見もおよべぬ鳥獸など奇とわやしきものを見する所幻戲籠脱刀玉
縁竿のたぐひ奇妙の術と旆す所かど處せきまで立らば笛吹音鼓打聲四方はひびきてかま
ひやく人の耳目をとらるかしや此大陣のさちも驚すれかけり家つくりて紙もてはれ

る招牌又辻談義露の五郎兵衛尉と譽ぐるわかきつげ戸口まかけたるありかれがいふこと聞
とて人あまざつとひ居たり講師さかき床のうへへのぼり書案のうへへ析木のかさしをかき
まづ左のふきを前よみて、聴聞衆よむかひ夫つらゝ阿彌陀經と考るよ如來の五劫の間思
惟し玉ひ上の一人より下の婆々嫁々よいさるまで残りなくすくひとらめとの御誓願のみの
くや我等までありがたくたふとき事みあらずやかるがゆゑ彌陀如來の寐玉ふこといさ
ておきてあぐみ居玉ふことだまなく十萬里かきたの西方よりこきたの方よ伸あがり玉ひて
衆生の地獄をつくるを見玉ひてのあややくとかきしみおぼざるよしをれよりの持國多
聞かといへる一騎當千の四天王に命せられ衆生胸裏の地獄をつぶす御分別のさきかと聲お
かしううちあげていひつゝかの析木とどりて書案と撰地打からしければ芝居一度も鳴動し
且笑且感る聲をばらくいやまごりけりそのとまりもあらずちある小屋つくりて外の方
まうつくしき小女の身うちも蛇のまといつきたるさまを繪まかきふる招牌とかげいだし
たるありかさぬきさる男戸口も立扇をひらきて往來の人とましまれつゝ聲たうやかまよ
びひいへるのこれ此まじるしを見玉へをも此女子こそ丹波の國なる奥山は伴願師の子なれ

殺生の罪科親の因果の子よむくひはべりてかく蛇よ見こまれ身うちままつりてはあれさ
らす容の世よすぐれてうつくしう生れつきながら人がましき交りからぬ身といかりまたり
十が一ツ罪障消滅の便ともあれかしとてあまねく人々よ見せ奉るに都よあきて四條の川原
浪波津よての道頓堀伊勢の國よゐてゆきての白子なる観音堂のはとりにて見せ奉りぬもの
よむくひのおそろしさのかくぞあある前代未聞又たぐひあらじいへづとによき話柄を招牌
よつめばかりもいつのりあらば錢どりゆまじ見玉ひてのちおこし玉へと聲かるよばかりの
よまれば見物の諸人蟻のごとくよ集蜂のごとくよ群りてかりやのうちよいりこちおしあち
かしひしめきあひてこれと見る此おあごのそあにちこれ六字南无右衛門が娘楓あり憐むべ
し楓のこゝろよもあらで眉をよそがき唇をよめ頭お花弁をよさし色元結をよすび髪
のゆひさまも今様よどりあげて阿曹よめきさる容よつくり床机よめきさるものうへよ紅の毛
氈よきて尻かけよの姿婢娟たる牡丹花の咲いでたるごとくよてあたりもかややくばかりう
つくしけれど腹手首咽くひなどよ蛇ともいくつとあくまとひつきかまくびをおして赤き
針の機ある舌を吐出し目をばちよとして巻くよま見るよさへ身の毛をよたつばかりなり

見物の諸人何の遠慮もなくかれの顔をちのよとらちまもり世よまれある娘あるよあく
蛇よ見こまれしおかしむべき事よあらすやかよるあさましき身よだよなりたるをこれよ
しう人集て見することよの女のよあわびしとやあもふらん不便のよとやといへば傍
らの人のいへるのいあよの親めよさだめて非親非道よかこなひつる悪人よあらめその
もえよ親の因果のよよむくひてあさましき身といかりつらめさるほしき者のうみつけつる
子なればおれも又姿こそうつくしけれ志のよさでもあめつらめ世の人のよき戒めをあし入
よ面よさらさしむるのよへつておれらよ罪科のよあうするよすがあり憐むべきよあらす人々
よく見てやりねおき口々よいふを聞つよ人々に顔まもらるよ楓よ若しよあはありあらん
よかり思ふべし抑石山寺の石光山と号しよ平勝實六六年の草創あり聖武天皇の朝僧正
辨如意輪観自在丈六の尊像よ安置す一千餘年を経る靈場あり後の連峯峨々として岩間堂
取瀧關あつらなり前の勢田川のあふれ森々として湖水よつよくけよ此地の月を賞して近江
八景の一勝とせるもうべなり扱此御寺の門前よひとりよ浪人深編笠よ面をくくし小鼓を打
つよ月あつよ小倉山よの名のあくれきりけりよとくせ舞よのうたひをうたひ物をよ

まかり往來あまたの人のうちより年のころは十六七ともおぼしく容貌すぐれて美しきか
 田舎染とい見ゆれど紅のこぞめの梅の小枝も春霞立田の山の鶯といふ文字と縹よそめいだ
 したる木綿のふり袖着てもすそかきげ禪衣のけ手覆腰巾草鞋を穿替の小笠と携さへて巡禮
 の道者と見ゆる女の前浪人の傍あちのづき扱もしほらしき鼓の音ぞといひつゝまばしだ
 らずみぬかの浪人編笠をしま此女をつら／＼見てさてもいぶのしさよおことのいおさあき時
 出雲の國大社の社家に養子よつゝのしる入重垣のいあらすやといふ前の女これを聞打お
 せろきたるさまよてまばしいらへもせず只打まもりてゐる浪人ふさ／＼びいひけるのかく寄
 落してひのしにうける姿あれいふるも理なりとて聲をひそめそれのしのおことゝ兄長
 谷部雲六なるのといふよど女を益かどろきたる体なりけりうくて雲六をもの蔭にいざな
 ひ笠ぬきていひけるの世と忍ぶ身なれ人目おさき所よての面を隠らしおさしおことの
 何ゆゑにうける姿とあり具せる人もなく若き女の身よてたゞひとり此邊のい來りしぞとど
 んれて女さての兄上よておしけるものをとて涙をさしぐみさきほどのしこの算あきよう
 らのふてもらひしにけふふづぬる人もあつたといひしはまことみ見通しのうちあひありさ

て妾が薄命とさきてさへ養家の父母此春わづの一月の間よつゝきて身まのり玉ひ妾ひとり
 あとのこのりしが養父の弟おて妾のさめよの伯父ある人養父の遺財と奪とらんたくみよて
 情なくも妾とおひ出しぬれをせんすべく此上の兄うへおあひて身のうへとこのみやすよ
 り外おしと思ひのく巡禮よ姿を扮して物をつゝ辛うじて大和の國はいたりけるおかん身在
 京の節かしこにて俄に浪々の身とあり玉ひゆくゑ志れずとさよつゝるゆゑほとんど力かち
 てや死ん淵川よ身をまぼめやすべきとさまのうさまお思めぐらしけるがせめて諸國の靈場
 をめぐりて養父母の菩提の爲我身來世をたすのるよすがおもせをやと思ひつゝ社家に育て
 佛よつゝのふるの心たがふるやうよいあれと神佛もと同体もさけやくるしのらとと心と決
 しをちこちを巡拜してけふしも此何寺もまうでしお思ひかけや兄うへまほひ奉りしは
 菩薩のみらびき玉ふお疑なしかん身いま何ゆゑ俄に浪人し玉ひのびのりお替り玉ひつ
 るぞとどひのひせば雲六こたへて我身のうへの物語の一篇お盡されず殊更こゝの路の物と
 いひ人立おはき所なれやくのしき事と語がたし日我住家へともかふてしとていとがのしく
 鼓志きものおとりおさめ女をつれて家おかへりぬ雲六が成道の道のものが知るべから

ずのくて日も西山よのふきけれバ參詣の諸人足を之やめておのがさまん、飯路をいそぎ
 俄にはぬ莫はくたる折をりしも一人の虚無僧尺八の笛をとり瀧おとしを吹すまして此處おほゆと來る
 その後しりへおつきて腹巻はらまきは摩手こてす脇わきにつけたる捕手とりての人数ぬき足しつゝ忍しのびより時分よしどや思おもひ
 けん前後左右ぜんごさゆうととりおこみ一言の詞ことばもあく手てよと十手じゅうてを打うちふりてからめとらんとおつり
 けるが虚無僧尺八こむそろうしやくと以もつておしらひまばし打うち合あける所ところも思おもひのけざる背後うしろのあり家のうちよ
 りいびの鬘かみの髪かみのこし頭かしらおどりかく刺さすてゝいとおのしげある男おとこ一ひと根こんの棒ぼうととりてをさ
 り出いで捕手とりての人数にんずとめつゝ打うちふしけるにぞ彼輩かのら敵かたすることあさはず散さん々ざんになりて逃にげ
 去さりぬ時ときは彼男かのせとこ棒ぼうをうらりとなけすてゝ平伏へいふくし土つちと額ひたいとすりつけて恭まうしくいひけるは某
 察さつし奉たてまつるお君きみの佐々木家ささきけの若殿わがの桂かつらぎ之助のすけ國知くにち公こうにうたがひおし實じつとなんあうし玉たまとねのしと
 相あひのふる虚無僧頭こむそろうかうを打うちふりこい思おもひのけざる事ことを聞きものお某それの一所しよ不住じやうの修行者しゆぎやう者ものまでも
 とより卑賤ひせんの者ものありかならずしも人ひとがへし玉たまふおといふの者のさねていはく世よと志しの
 ぶおん身みなれば容易よういお實じつをたのし玉たまはぬも理ことわりなり先まづやつがれが身のうへと前に告つげきこね奉まう
 らんそもやつがれのぬん家いへ土名のち屋山やさん三郎ざうが僕べ鹿鹿しかしかとす者の弟あに三郎ざうとす者ものもてんも
 との兄あにとともよつのお侍べいりしがやつがれのぬをわりて仕つかへを辭かし古郷河内の國ふるきやうがわのくにのへりて
 くらせしうちらなごや二郎左衛門ぢらうざゑもんの不破ふは伴ばん左衛門ざゑもんが爲ためは關打せきうちよあひ山三郎さんざうの平群へいぐんの館たての騷動そうどう
 かつきてやつがれが住家すまかもおち來り二ツよの君きみのおんもくへとたづねて安否やすひをとひ奉まつり二
 ツよの伴ばん左衛門ざゑもんをたつね出して父ちちの仇あだをむくいんと我々われも命いのちじて所々ところとつねしめこのご
 ろの山三郎さんざう鹿鹿しかしかを具ぐして西國さいこくも旅立たびだちとべりぬやつがれの露つゆの五郎兵衛ごらうべゑと名なを更か辻つじ談義だんぎにて
 とよせて京大坂きやうおほさかのすすよおよばす所々ところ人立ひとたておほき所ところもいたりて專まこと尋ねはべりぬしあるよ
 唯今ただいま君きみよめくりわひ奉まうるの我々われ主従しゆじゆが一念ねんとよきし所ところあり世よもあるおん時ときならは某等それらのご
 とさ賤いやしき身みのあん姿すがたを拜まがみ奉まうることだもあたふまじきお前まへ前まへ拜謁ばいぎやくつらまつる勿な体たいなまよと
 いひて實じつ心しん面めんもあらわれけれぬ虚無僧こむそ打うちらあつきさる誠まこと心しん聞きうへい何をあつゝむべき汝なんぢを
 推量すいりやうもたのめす我われの桂かつらぎ之助のすけ也汝なんぢの面おもて見みしらすといくとも山三郎さんざうおしもべお鹿鹿しかしか三郎ざうと
 て兩人ふたりおりとのねてより聞きかよひぬとのさまひけれぬ猿さる二郎じらうのちおりがさかおん調しらべあり
 のたさまでよかばへはんべり不破ふは道みち犬いぬの悲あはれ意い東方とうほう若君わがきみのあん身のうへまつきておさまん
 ちあぐべき事ことわれとも途中ちゆうちゆうよてのきこまがさしこの捕手とりての奴やつ原はら人数にんずをましてふふとびま

ずのくて日も西山よのふきけれバ參詣の諸人足を之やめておのがさまん、飯路をいそぎ
 俄にはぬ莫はくたる折をりしも一人の虚無僧尺八の笛をとり瀧おとしを吹すまして此處おほゆと來る
 その後しりへおつきて腹巻はらまきは摩手こてす脇わきにつけたる捕手とりての人数ぬき足しつゝ忍しのびより時分よしどや思おもひ
 けん前後左右ぜんごさゆうととりおこみ一言の詞ことばもあく手てよと十手じゅうてを打うちふりてからめとらんとおつり
 けるが虚無僧尺八こむそろうしやくと以もつておしらひまばし打うち合あける所ところも思おもひのけざる背後うしろのあり家のうちよ
 りいびの鬘かみの髪かみのこし頭かしらおどりかく刺さすてゝいとおのしげある男おとこ一ひと根こんの棒ぼうととりてをさ
 り出いで捕手とりての人数にんずとめつゝ打うちふしけるにぞ彼輩かのら敵かたすることあさはず散さん々ざんになりて逃にげ
 去さりぬ時ときは彼男かのせとこ棒ぼうをうらりとなけすてゝ平伏へいふくし土つちと額ひたいとすりつけて恭まうしくいひけるは某
 察さつし奉たてまつるお君きみの佐々木家ささきけの若殿わがの桂かつらぎ之助のすけ國知くにち公こうにうたがひおし實じつとなんあうし玉たまとねのしと
 相あひのふる虚無僧頭こむそろうかうを打うちふりこい思おもひのけざる事ことを聞きものお某それの一所しよ不住じやうの修行者しゆぎやう者ものまでも
 とより卑賤ひせんの者ものありかならずしも人ひとがへし玉たまふおといふの者のさねていはく世よと志しの
 ぶおん身みなれば容易よういお實じつをたのし玉たまはぬも理ことわりなり先まづやつがれが身のうへと前に告つげきこね奉まう
 らんそもやつがれのぬん家いへ土名のち屋山やさん三郎ざうが僕べ鹿鹿しかしかとす者の弟あに三郎ざうとす者ものもてんも
 との兄あにとともよつのお侍べいりしがやつがれのぬをわりて仕つかへを辭かし古郷河内の國ふるきやうがわのくにのへりて
 くらせしうちらなごや二郎左衛門ぢらうざゑもんの不破ふは伴ばん左衛門ざゑもんが爲ためは關打せきうちよあひ山三郎さんざうの平群へいぐんの館たての騷動そうどう
 かつきてやつがれが住家すまかもおち來り二ツよの君きみのおんもくへとたづねて安否やすひをとひ奉まつり二
 ツよの伴ばん左衛門ざゑもんをたつね出して父ちちの仇あだをむくいんと我々われも命いのちじて所々ところとつねしめこのご
 ろの山三郎さんざう鹿鹿しかしかを具ぐして西國さいこくも旅立たびだちとべりぬやつがれの露つゆの五郎兵衛ごらうべゑと名なを更か辻つじ談義だんぎにて
 とよせて京大坂きやうおほさかのすすよおよばす所々ところ人立ひとたておほき所ところもいたりて專まこと尋ねはべりぬしあるよ
 唯今ただいま君きみよめくりわひ奉まうるの我々われ主従しゆじゆが一念ねんとよきし所ところあり世よもあるおん時ときならは某等それらのご
 とさ賤いやしき身みのあん姿すがたを拜まがみ奉まうることだもあたふまじきお前まへ前まへ拜謁ばいぎやくつらまつる勿な体たいなまよと
 いひて實じつ心しん面めんもあらわれけれぬ虚無僧こむそ打うちらあつきさる誠まこと心しん聞きうへい何をあつゝむべき汝なんぢを
 推量すいりやうもたのめす我われの桂かつらぎ之助のすけ也汝なんぢの面おもて見みしらすといくとも山三郎さんざうおしもべお鹿鹿しかしか三郎ざうと
 て兩人ふたりおりとのねてより聞きかよひぬとのさまひけれぬ猿さる二郎じらうのちおりがさかおん調しらべあり
 のたさまでよかばへはんべり不破ふは道みち犬いぬの悲あはれ意い東方とうほう若君わがきみのあん身のうへまつきておさまん
 ちあぐべき事ことわれとも途中ちゆうちゆうよてのきこまがさしこの捕手とりての奴やつ原はら人数にんずをましてふふとびま

よきたらんハ必定ひつちやうされぬとくくかん身みをかくし玉たまふへしもしかの奴やつ原はら来りぬいししのし
のとのらひぬべしとて耳みみにつけてさくめきぬさてはるのむのひの方かた家ありあり障子しやうじよ
一子し相傳さうでん名方めいほう膏藥かうやくと筆ふでふとみかさつけざるを門口かどぐちにたて外ほかの方かたもまこの名なをとしるし
ざる招牌せうはいをのけならべもろくの奇病きびやうのさま解體かいたいの圖ずをさこれらをもかきけいたし
たるハ外療ぐわいりやうの薬くすりをひさぐ家いえありけり猿さる二郎にらう指さししてのしこのやつが旅宿りゆうしゆくまでハ幸さいはひある
じハ京上きやうじやうりして家いえもはら老僕らうぼくあるのみされはる者ものもいはずと桂かつら之助のすけをい
ざあひてこの家いえもいたり裏うらも入りてあり障子しやうじをもとのごとく引ひきて座ざをたてずして居ゐた
りけり此時このとき已ま日ひのく果はて夕月夜ゆふつきよの光ひかりりあきらかなりけるが果はして捕手とらの者ものとも人ひと數かずと
まし來りて此家このいえをとりのこみ聲こゑさのやのふよのわりいひけるハささほと此家このいえもあられたる
虚無僧こむそうハ佐々木ささき桂かつら之助のすけ國知くにちふうたがひあしいのハ國知くにちかんち官くわん領職りやうしやく漢名わんめい殿てんの内意ないいもより
勘當かんたううけたる事ことと遺恨ゐんも思おもひひそのハ野伏のぶ浪人らうじんどもをのたらひ漢名わんめいのに敵てきせんといある
よし注進ちゆうしんの者ものありてさこしめされからめとりてきたるべしと嚴命げんめいとらうふりて我輩わがはいはせむ
うひつるありのハれぬ所ところとくこも出でたりていさしめをうけよるハは手てむらひせし

やつめもなんぢハ一味いまいの者ものあらんかのやつめもとくくこへいごせ昔むかしひきぬきて思おもひ
らせんずると口くちよハ猛まうくのしれども猿さる二郎にらうのささほとの手てきみにおそれ内うちよをよみ
らんする者ものハ獨ひとりもなく只たださわかしきのみなりけり時ときもあがり障子しやうじハ人影ひとかげうつり桂かつら之助のすけ
としていのみかんぢらしつまりて我わがいふ事ことを聞我耻きけれはぢをひのひて今日こんにちまでいきならへ一ひと
不住ふせうまさまよひつるがとて武運ぶげんも盡つたる身みられぬ此所このところもあきていさきよく腹はらのきやふり
て相果あひはつるぞのしいさ首くびととりて高名たかみよせよ者ものともとよばよりけるのやつて障子しやうじのすままよ
り鮮血せんけつこやりてながれいでぬ捕手とらの者ものわれさきに昔むかしとりて賞銀しょうぎんもあつたらんと勇退ゆうたいをせら
そハ障子しやうじと打うちふして内うちと見みればこのいのハ桂かつら之助のすけハのほら走はして正面しょうめんの胡床こしどのうへハ人
の長ながはどあつくり五臟ごぞう六腑りくぼをいストりさる神農しんりゆうの胸人むねひと形かたち有あ茶匙ちやくしと持もたりハ藥やく草そうととりた
るをすゑかきぬ障子しやうじのひまより血ちわたと見みぬしハ赤膏せきかう藥やくもぞありけるの者ものもこれを見
て只ただあきれて酒さけも酔よさるこちしけるささて欺あざわられたるの口くちをしさよさるにても今の聲こゑハ
桂かつら之助のすけハまさされなしのしこにかくれたるようたがひなしとて奥おくの間まと目めをけり走りいら
んとひしめき誤あやりて傍そばもわりける策謀さくぼうとふみたふしけるさちまも數多かずたの蛇へびのふり出でての

れらが手脚よそとひつたけるにぞ打驚きてそわきこち又誤りて青鐵劍をふみのへしければ
 膏藥足のうちねばりつきてはあれずはとく進退を先ひて只嘯動するのみなりけり時分
 よしと猿二郎たすきひきゆひもすそのうけて身がるよ打拵明晃々たる大太刀を抜もちて一
 問のうちよりとどり出めつゝ斬りきりつれみかへく大お猿狼一八として敵する者に
 なりけりこの大太刀をもと居合及引太刀おれきりつけられたる痕蚯蚓のごとくこれわ
 がるのみよて一命お恙いなしといへともしばし魂を奪れてこころますく感したる者ぞ
 もなれの餅も黏たる蠅のごとくたふれしましよ起も御す手をすり足をすりてくらしくよゆ
 るし玉へと打わびつゝうらうじて起上りけるが蛇持星の膏藥も引もどさるゝあちちしてま
 けつまろびつ逃ゆきけり猿二郎の太刀をすてく打笑ひさても臆病ある奴原の因果娘の蛇
 巻も思ひもるけず用立し禍の三年目ともいひつへしとひとりごちて蛇どもどもどの獄
 籠もうち入れ一間のうちより桂之助をとまかひ出られらを殺いていかへりて後目のさまた
 げみいへむをぞと刃引太刀をもちひておどしゆつらしく思ひはざるよ不破道犬君を失ひ奉
 らんとすうりて官領の命といつり君のおん心よおぼへあき事とすしたてく捕手に向ふる

み 塚あし大切のおん身おれいのあらずしもあろくしく出たるき玉ふへららずのれら
 度見おはへたる此家よ忍ばせずの危けれの今宵のうち別所へ御座をうつし奉らんいざ
 せ玉へど催してつひよ兩人いてゆきけり

○徒然草おめおもみといふ草蛇よさざれたるよよきよしを記すといへともいまたま
 うろみず蛇よのまれたるお申柿の肉と粘飯のごとくねりてつくるよしくものなし
 度々まろみつるよ一度もしるしなき事おしよきざみ煎じてのみみすべし蛇はど
 解す也本文 蛇の話よつきて偶思ひにだせるまへ筆のついでよ記したる

○仇家の恩人

愛よ又湯淺又平といふの太左正見といふ名画人の弟子にてそのみも画道よ秀たりといへと
 もゆゑちりて師の勤當どうけそのうち正見も小栗と筆の伝らそひよよりて勤勤の身とあり
 ぬ又平の漸々よ零落しけれの妹藤波白拍子となりて兄をみつぎけるがこれもお慮お親書
 れますく困窮しけれのせえすべかく大姉もろとももとのすみろをまりて近江の國にうつ
 り大津走井の邊とりに住給をかきて往來の旅人よまれをひまふ妹が青蛇の爲にもと思ふこ

ころより多分佛像を画きぬ十三佛地藏菩薩のかわひかりそのころの民百姓の家は木佛のみ
 れあておほくの此又兵の佛像をもとめて持佛の本尊としけるとや佛像のみおほらず浮世
 の人物さまざまのされ書をものきけるゆゑ浮世又平大津又平ともいへり又生つきて吃害よ
 てありけれの吃害の又平ともいへりその書と大津書とも追分書ともいひて時の人童あどの
 めめる事おほりしとぞ又平が妻の名を小枝といひ藤波が次の妹阿龍も今の兄又平よ養と
 れまよたりてひとつは住ぬ藤波の前つ年佐々長三八郎が爲よ罪なくして殺されたれ又
 平何とぞ三八郎を一刀刀うらみて妹が修羅の宿恨とはらしつうのさんと日來ころのくる
 といへとも三八郎出奔のち弗おもくへしれされのむあしく月日をおくりぬ扱ある年の春
 藤波の祥月命日又わたれる日妻小枝妹阿龍等がすよめよより縣神子をやとひ藤波の口よ
 せて冥途のおとどれをきよぬさて降巫上座よなほりて目うへの人にや目下よや生口の死口
 のとたつぬれの小枝すよみいで目下のものよて死口ありとまたへつゝ櫃の葉よて水むけす
 れの巫のさよのなる弓をとりいだし弦と打ちらして日神保をぞとあへける
 夫つよしみ散てまうし集る上り梵天帝釋四大天王下の閻魔法王百道の冥官天の神地

て亡し女ならめそれがし六年以前藤波と殺せしも同年同月同日あり廣記世界といひひあ
 らよく似たることもあるものあいのなれぬ長祿二年の今月今日女の刃あふるる目を
 女子もいのある因果よて劍難よ死せしそと藤波が事を思ひ合せて涙を落しつゝ暫らく回
 して居たりけるよ又平の妹於龍朽木塗盆よ日野枕すゑて持いで鹿林の齋とめし玉へといひ
 つゝ修行者の顔をつらく打まもりそあふの佐々長三八郎よわらずやといひておほぬず手
 よ持たる物を地上よえとと取落を修行者いふありさういふをあふの何人ぞ見忘れたりとい
 へを於龍泣聲よて見忘れしどの能もいなる事よ妾のそあふ殺されたる藤波の妹龍とい
 ふものその時妾の十三才京都佐々木の旅館お寢間に通ふ廊架よて手燭の光りお顔見合せた
 しのよ見とけけたる三八郎刀の鉋打手燭を破と打おとし逃去たるの覺おほらん折しも風
 雨とげしくて庭木の花も風前の灯火ときぬさる姉の歎覺借せよと呼いよを先程より屏風の
 かけよ様子を見よ浮世又平刀を抜ておどりのいでものいはず斬つくれを修行者手ばやく
 わたりよほりほふ机をとりて丁とくれば皿よどささる青黄赤白の顔の具四方おさつと
 飛散て秋の花野よ異あらず又さりのつくるを愛留ていのよも某が實の姓名の佐々長三八郎

に不思議の出會なりとて其のち丹波の國にうつり住六字南無右衛門と改名したるいわれ百
蟹の巻物を奪ふるの長谷部雲六一人の所爲なる事藤波の怨靈兄弟の子どもにつき姉楓の籠
に見こまれ弟栗太郎の盲目となり文彌と改名したる事文彌孝全一て若君の身がわりとな
りし事楓孝心深く父の汚名をすゝがんと見せ物芝居に身を賣て金をどくのへのかの巻物を買
取さる事月若に妻磯菜をつけて河内の國某の玄のばせ置おのれの回國の修行者に身を掛
してかの巻物をさばさへ桂之助いてふの前二方の行方をたづねに出てけふしも不思議にて
とにやどりさきは位牌の法名を見て似たる事と思しまでこまやかに語りけるにぞ又平夫
婦お龍もはためて其實を知さぐひまれなる忠臣やと轉感嘆にたへざりけりなむ右衛門かざ
ねて曰おん身等に出會し恨の刃にかゝりて死し冥途にいたりて藤波のに云わけせんとい
かねて望む所なれども主君彦彦夫婦親子の先途を見どゞけ再世に出し悉らすまでの死に
き命なればまばしの間某が命を某にあづけ置玉のれかしかの宿願をはたせしうへの首は
しのべておん身等に打るべし常言にも大丈夫の一言の驥馬も走すといへり若此詞に露ば
りもいつりあらば立所に天地神明の降罰をかうふるべし恩の思仇の仇なり少しの恩を

て冤憎の命をさすかるべき所存なしと詞すどしくいひければ又平返答の詞のなくつと立
刀をすらりと扱はなちなむ右衛門がさづさへたる編笠をすばと斬て佛壇に手向いかに
汝が敵佐々良三八郎か首をかくの如くなしたれば速に恨をばらして佛果を得よ南無阿
陀佛のみだ佛と唱へ極南無右衛門に向ひ普の障護が例ふならひ今己に妹が仇をむくいた
ばもはや恨の少しもなし此うへの妻小枝が命をすくひまゐりし大恩を報するのみなり
の恩を報すべき仕方のかくどへだての紙門を押しらけば一間の内に聲ありて某先刻よ
こゝにありて委細のゆゑを問つるを言つと立出る人の乃是別人に非ず徳々木桂之助
知なりなむ右衛門様のはしまで追立て平伏すれば桂之助いひける我依者の爲に連れられて
行を亂し汝等が誠言を採ひず今思へば藤波を非難の死に果敢我手をくだして殺せしも
なり我眼ありながら誠の忠臣を見ることわたの千百輩の巻物を奪しも汝が仕事と思ひし
大なる誤りなり今汝がものがさりをきけば楓が修行により若君を請め出し文彌が忠義によ
りて月若も意なきとやたゞひまれなる者どもを不徳なる身の果と思へば恩にせざるが
し我不行跡によりてその恩を報ふりかく藤波の身をたうてい文彌が恩にせざるが

せ物芝居に賣て百兩の金をととのへのの巻物を買もどし諸人よ面をさらし丹波の國蛇娘と
世に恥とあらえず憂身のうへと成ぬこれみな泣きあせし業にあらまや唯今いからず出會せ
し天の與へ我宿恨とはらすべき時のいたれるなりたどへ生皮を剥剥子なきさむども飽べ
のらすといひつゝ寶子の上に鼻の尖をすりつけくしてさいなみければ雲六の一言だに返
答すべき詞なく只ゆるし玉へくどうちわびけり時に又平が妻小枝さきはせより雲六が顔
をつくしとまもりつめて居つるが大におどろき先年杉坂まで妻が懐中の金二十兩を奪取
逸去する盗人のすきはち此者にてたしる見かばえありといへば又平さして扱は去かあり
けるか恩人と仇人と去るも同月同日にせうらす出會せし正是天のみちびき玉ふ處にして
善惡つひに報ある事と示し玉ふ所ならんいかに雲六とやらんよくきけとて小枝金をうばひ
れいひわけきく首縊て死んどせしを三八郎が情あて金子を合力され危き一命を助かりたる
事の始終をつぶさに語りければ雲六頭をされてき居たるがやがて一刀を抜て腹にぐさど
つきたていと苦しげお息をつきていひけるのあぢかそろしや勿体なや今やうく天の賞罰
あさらのある事を去り積惡の報の觀而めめぐり來ることを曉しぬ某が懺悔物語を一回おん

聞くだされのしのかみ某在京のうち五條坂の曲中を通ひて過分の金銀をついやし身
たちぐたきにより偶惡念おこりて百蟹の巻物を盜取ぬん館を出奔して北山をすぎ杉坂に
たりけるに折しも風雨つよかりければまばし木蔭に暗間を待居るにそれある婦人來か
り玉ひ懐中おもげよ見えけるゆゑ又惡念おこり婦人を地上に蹴倒して二十兩の金をうば
仕合よしと歡びてその所を逃去そのの巻物を金五十兩も賣けるが一所不住に迷わ
く間にかの金を残なくつかひ盡しつひに零落してあゝる身となりぬ某の命を奪て死まい
さらしめんとし三八郎どのは金を與へて死を救玉ひつるよし今思へば善惡のたがひ誠に擧
擧をへだつるがごとし豈賞罰の報ならんや扱某ちかざる當國ふいたり草津の驛に住家
もとめ幸ひ石山寺の御書聞帳ありてよきいしければかの門前より出敵を打くせ舞くの
をうさひて物を乞けるに前の日思ひうけず幼年の時わかれたる八重垣といふ妹にあひ仕家
おともなひのへりて何くれと過去し事をも語りける妹某がらく涙入したるいとれを
問けるも又惡念おまりいつりていひける我前の年在京の別個五條坂に通ひ過分の
銀をついやし其おひめを償はん爲り殿よりあづのりさる繪巻物と買入しつるがつひに其事

あらはれていとまたまのりなく涙々の身となりぬ格別の科よもあらねば今ふもかの器物を
うけもせしてさし上れば販参ののちふの必すなれども本金に利金をくひへてかれこれ百兩
ばかりの金なればかか〜とこのひがたく今先非を悔るといへどもひなしといひてそら
泣いて見せければ妹これを實とて去からば妾が身を賣て金をとこのへその巻物をうけもど
いて販参を斷玉へといふよぞ某心に計なり〜と歡びうまくいつのりて情なくも妹を當
所の伏柴の里にゐてゆき百兩も身を賣て今日しもその身の代をうけとり天へものぼること
ちしてかへる路の傍より一羽の雁首をなげて落居たり飛けはいのなく見ゆれども拔足しつゝ
拾取て見お矢の疵箭のあともか〜切りこしぢよあへる雁金の行倒かと推量し何にまれば福の
いたり時晩の寐酒の肴としひさ〜飢たる瘦腹と肥さんものと心のうちに歡びはや榮耀心
いでと提てゆくもわづらはしと金財布の紐のあまりを雁の足にゆひつけ肩の尖にふりかた
げて懐手して販りし何どかしけんかの雁途中にて蘇生く〜りつけたる財布とよも空虚
をさして飛さりけるあひだ翼なき身を悲〜みてあとをしたひて此處まで追來りしが落べき
所もあるべきあ此よあちて君と始め奉りあ〜方に出會し某が舊戀のあらはるゝの正

是れの前にも身を賣はどの實ある身の代をむさばかし某か非道とにくみ天罰を與へ玉ふ疑
かし今にいたりてやう〜と思ひあさり休とて財布をとりあげ此白兩の金の先年奉し二十
兩ふ利を加へて又平どのにかへすあひだ合方うけし三八郎どのへ此儘返し玉ひて彦息女
どの〜身とあがき返し玉ひれ〜さもあらば我身の罪の一分を減らしていさゝの來世をた
すかる便とも相なるべしいはれを聞ねばよそごとと思ひ〜此度石山寺の門前にて諸人よ
見する蛇娘の楸どのに疑ひし聞と〜けてよ彦兩人といひて掌を合せて拜み涙と汗のごとく
なが〜けれそ又平の財布をとりてあむ右衛門が前よ〜某六悪邪懺罪して實心にひるが
へりしうへい不便も有すればかれが望のごとく此金もて息女とあがなひしへかしといへ
ばあむ右衛門頭を右左にふりうとかしいか〜八重垣とやらんさはりり實ある者ぢうち川
竹のながれおまほめ長く辛苦をうけしめんしのびがたき事からずや娘の心みづから覺悟
のうへおて親の爲おはづか〜めを要るなればせんすべし此金をあへして八重垣をとりも
どしつゝのすべしといひてうげがなれば雲六若しげも息をつきいなく〜その金もて彦息
女の身をあがき玉ひらば〜へつて妹が實心のかひもあるべし然更この金かんの身の腹のあ

たり「落るよし畢竟天より忠臣孝子を賞し玉ひて與へ玉ふ小疑あし若海川にもちり
るば妹か志の水の泡と成りみべしひとへ小お九聞とけ玉のれあし親もわらずば某死
してもころよく眼をふさぎすすまじくと涙をあがして親がひけり桂之助も終に聞忌に
もつよく書にもつよき彼がねがひ末期の望なれをさうとまけつらひすべしとおもひはせ
かむ右衛門やうくこれをうけひけり雲六のうれしげ小打笑ひ今此世にのぞみあし
死出の旅路をいそがば宰相の傍前とけす罪のおん死し玉のれかして腹十支子よかき
やぶら咽吭をかき斬てうつふしに伏てぞ死したりける時かむ右衛門のの鳥をととりわけて
いらく此鳥雁小似たりといへともよくく見れば渡り書讀といふ鳥よりよく高く飛雁小似
て書白也目相見て孕み吐て子を生といへり野子益の奇疾方、蒼鳥の肉お人血を和して癪を
治する法ありと或名醫に聞たる事あり吃寒おも驗あるまじさやむらず思ひかけずの奇
鳥を得るも又一奇事おればころみもち玉のすやといふも又半やがてかの鳥の肉
をささとりて火おあぶら雲六の鮮血ととぎて食しけるに餌も咽すとやのにかり生れつさ
る吃寒忽常の人のものいふごとくになりて是もかう天の御くならんといふことあり

あきらりかれむ小枝阿龍等あ不思議くといひて歡びあひぬ誠に奇異の事なりけり
ある折しも外の方に人の足音ひとぎければ又半小枝阿龍に目ばして桂之助を一問に
あらし雲六の屍を蒲團おくるみて床の下に押入血しほをぬぐふひまもなく見動物芝居の主
櫻を伴ひてととくといひつゝ裏にいりかむ右衛門よむのひていひけるおん身今日しも
此宿をよきり玉ひてを懐が見つけて喜しお櫻をわらせずさんたり旅宿をたづね参しとい
へば櫻の父とどりすがりのりたる此お養母うへも悪くあひするのとてむとて涙に潤るし
かむ右衛門の折よき幸と歡びたぐひに、これとかがたりたひて徳意居玉よひかひゆゑありて
思ひのけき金ととのひつるが元金目録を以て娘をもとしまいたまはすやといへば芝居主も
のうけがひ櫻事取大坂の勿論伊勢屋張のちたりまでめて行本はくの金を借つたれば則
座に百兩渡し玉のといへにもいとまをつかすべしといふ雨前右衛門ますく懐びかの金
をととり出して渡しければ芝居主數とあらためてとりかきあこい思ひよりける櫻が伴も上
とて金のうけ取いとまのさるしを置文あさしるし問信すそとて與へ櫻をわたして又さ
ねてまかゆべといひて山、ぬ時と二拜の御鏡、渡り勢田のちたりと夕日の影を照しけり

○名画の奇特

秘も其時なむ右衛門主君桂之助よねがひて娘楓おめ心のをさせ又平夫婦阿龍等にも引合せ
 今日のかいしき物語をかたりきかせければ楓打明て因果轉轉の理善惡つひに報ゆる事を曉
 して嘆息しけりかくて又平夫婦食事を調しておむ右衛門女子に與へ一間のうちよみちびき
 てやすませけりおむ右衛門女子のさへてひさしき田舎おればさまぐの物語に思はず時を
 うつしやうく睡よつきけるよやとわりて楓が聲としておあやしくとおめきさげひけれぞ
 なむ右衛門驚きねぶりを醒して見れば楓の腹みぞつきれの小蛇帳より這出ると見之しお忽
 丈一丈ばのりの大蛇と變り楓が身をいくへともかくまどひぬわなのなしやこのぞもいあよ
 すべきとわいでせよひけるお枕上におきたる袋のうちよりおまたの蟹はい出て大蛇はとり
 つき蟹を以て肉をとさみ血の泉のごとくおがれてお前へ大蛇を殺しおらんぬ蟹のたぢちよ
 もとの笑のうちよはひいると見之しおをならし恐ありけりなむ右衛門夢さめて身うちよ汗
 をながし楓をゆりうごのしければ楓もねぶりをさましてお上りけるに衣をそくつろげて
 腹を見るにこれまで片時もはなれぬる大蛇いつくぬらしやうとよもまたよかしおむ右

衛門さての正夢までわり一おと思ひつゝ笑のうちよりのの巻物を取り出してひらき見れば
 画中の蟹の鉄さ盡く鮮血つきてぞわりける此馬巴お四更のころなりし又平楓がおめきた
 る聲を聞つけて起いで來りおむ右衛門が夢中の事をさく灯火をのこげてのの巻物を蒸し
 撃を打ていひけるの奇なるのあ妙あるのな巨の金圖の清和院成光奉多醒醒の五朝に住
 へて官大細言ふ至る會てお府に藏主と金圖を賣ける馬毎夜おの月のはとりよ出ておの巻
 くひしと古今著聞集に見へりまた仁和寺の佛堂に金圖の通馬あり近田のはとりに出てお
 の巻をくひしといふまた河川の國金山村牛頭六王の佛堂の通馬おけしと
 たよみの話のかねて聞傳ふるといへどもお前かよる奇特を見る不思議と佛堂の通馬
 金圖ことお精神をよめ蟹の繪お妙を得たる佛堂の名聞無異といふお大徳の御より
 書たる百蟹の圖よならひてかきかるとい聞つるが見るに今ははしめりお前かよる
 が如し奇特あるもつべかり其これを見てもお前かよるの理善惡とよめたりといひつゝおむ
 おししとておむいひけるに基につきて思ひ出せる物語ありお前かよるの理善惡とよめたり
 久世郡細田村お一個の裏女あり會て佛堂を信ず此お人おまたの蟹を撰てくちらけり

すのの女を見えてゆいれみ美食にらへて壁を盡く池ふひなつ又その父一時野も出て血の蟲
を春を見てゆいれみ若藝をばならやらば我娘を汝もわたへんといふ蛇これをさく人たるさ
まふて壁をばきて去しむその夜衣冠の若人來りて約のごとく女を與へよといひて一室ふい
り忽大蛇こ變じて女の身をまよ時小前の日たすけられたるむまたの壁ごとくおわつまり大
蛇の遍身を斃殺して女をすくひ大壁の去小壁のそこに死すよりてその所に壁木よび蛇のか
らをうぼめ寺を建て普門山壁満寺と号す或また紙幅寺ともいふよ一元皇釋尊卷之廿八お見
えたり息女の事よく此事も似たり思ふよのれ陰徳陽報の理を示しこれの名論の奇特もよ
りて孝女をすくふ共ふ是佛の慈悲衆生濟度の方便也われ壁におしる我抑律の給を見玉へ
地水火風の四つの精のされてはるあき琵琶法師も思考全き竹杖めて煩脚の犬を打畜生道と
まぬのれて天堂も生るゝのたち子息文彌さのう姿繪とも見玉ふへう線青の髪す右胡粉の
肌無常の風も塗笠も骨のみ残る手弱女が肩にのたげし一枝の紫雲たかびく藤の花これ妹藤
波が成佛の姿さう積黒の角を折鬼なす心をひるがへして墨の衣に鉦うつさまの是乃長谷部
壁六が邪念を滅せし姿からすや善惡袋袋いゝるどりてもろくのかたちをなし善となり

の浪人あるが何とぞ軍略智謀の人傑もまごがひ兵學の餘緒ありともうかどひ知り再家をお
おさんものと思ひ立師とたのむびき人品を聞つくろふ此山の谷蔭に世を避て住梅津の嘉
門といふ人生得領智聰明にして軍學に眼をさらし石資孫吳の奥儀をさめり武學兼も秀玉ふ
よしその才名かくれかく替て兼好法師の草紙もさらひ武道徒然草といふ兵法の奥儀を記せ
し書を編玉ふよしうけたまはりてわざく管國よりつり住いのりもして相まみへ兵學の御
指南もるだかりかの奥儀の書をも拜見し度思ひし容易も人よあふ事とゆるし玉いざるよ
しよき門路もがふと思ひひふ今日も思ひのけす相まみへし誠是師とのむびき時節到
來天のみちびき玉も處なるべし向後ふん家の知徳ともおぼされて潮水の聲を命せられ兵部
の進退軍伍の勝敗御指南たのみとべるなりと低頭禮して思ひ入たるけしきを見へぬ嘉
門誠歎していはいまだ若輩の身を見て武運の心がけ深き恥辱さよいるで腹意に存べし何
にもゆれ且某が宅におん題われ人のいかにいひはやすのいまらざれとも某が術なる業の
林も入て薪をとり谷よくだりて水をくむのみ世の事いさら小女ら中殊異武運つれく早と
やらん書を編るなせのあともかき聞言あり軍師もど、いかにがま、やといひて笑つ、三

人打連て谷うげのいはりよのへりぬあくて嘉門家お歸り老母お衣服をきせかへ濡衣をぬ衣
りののーまぬ柴たきてあてあどしさま／＼にいたる体をうの若者打見て平日の老行を
思ひやりぬ嘉門茶を煮て若者にす、ぬ四方山の物語してまばらく時をうつしけるに折しも
外の方にまのぶきの聲きければ人跡たゑたる此くれば家に何者の來つるやといふあるうち
に案内をこへばもの、ひまよりうら／＼ひ見るよこれ一人の武士かり簀笠打着て笠の下ま覆
面したれを面いさだかぢらねども遠國の旅人とおぼしき打扮あり雪深くふりうづみたる柴
の戸をほと／＼と打た、き誰ぞたのみゆしたしこ、わけて玉のれといふ聲聞て老母立出何
人ぞと思ひしにおん身の頃日兩度まで來られし侍よあ今日も嘉門家おをらす御用の間よ
いあひやすまじたとへおんたのみのすじを嘉門おやしきのせふりども此方おおもふ旨もい
へばどてもうけがひやすまじいたづらふ足をついやし玉ふきとく／＼おん歸りいへかゝの
さねておん出無益かりといひすて戸を撲地たて、裏へ入る嘉門これを聞何者かればあられ
なく母人のあしらの玉ふきといふかり又窓のひまより窺見るにの武士雪中座としめ
情なきぞ御老母嘉門との家よおのさす此處にて歸宅を待すさんよろしくとりあし頼みは

べるといひて歸るけのひの見ぬざりけり折しも雪のつよくふり粉々揚々とし恰も柳絮の舞
がごとく鷺毛の飛ぶ似たりさらぬだお寒氣さびしき谷蔭なるよ朔風のげしく吹おろせば見
る／＼の侍の簀の毛お垂氷さがりて鈴のやうにから／＼とかり身のなかば雪中よりうづも
れて吹雪の面おつぶてと打たごとくあるを笠よふせき眞袖にはらひ齒をくひえりて寒氣を
まの女爲体 誠之餘備なく見へて今よも凍死べし形勢なり嘉門此体を見て益いふりりさて
も堪忍つよさ人かな覆面して面いさかと思へされどもいやしめらざる侍のあゝる眼裏を
いどのぬ体のあさま何ぞ思ひつめたる事ならんぞ舌を巻て居たりける湯に伊井を世間よ
太公望ともちひさるも大將たるひと賢を尊ひ敬 志の厚さのゆるみあり總て國家に侍るの
要賢臣にあり賢臣を得るよ禮儀をわつくせされば出て仕す職を施し金帛を以て招くとも賢
士を尊ぶ 志なき人への仕ふる事なしとやや柳の時嘉門母のををらなくよりあの雪中の
旅人の何者よひやらん見るも氣の毒の形勢なりおん心よかなはざるをあらば理をのべてお
ん歸しおされずや某出ておひかへーやさんやといへそいお／＼そちのかまふべからずあ
の侍そちが留守に間度まで來りてさま／＼のふ事我心にのなぬわうけのふべし

もふく師一つるが又今日も来りてそちわひさき望なれども仕官とする心なればとく
人よわいさぬまきくべのらすどかねて思ひて出行といつたりかへさんとするよまから師
宅を待んとてあのごとく寒氣に苦しむたけ者此方の心も察せず長居するうつけ人いよいよ
よそちをわいすべきふわら幸の若者よ會じて還歸すにあらとどいひて若者をちのつけ
お詞をのへていひけるは汝さきはど奴僕ともおもへといひつる詞よよりてすつくる事あり
かの雪中の侍を汝が辨舌を以ておひのへせいろよいふとも嘉門の無出せしといひて是非ど
もへせといひつくれ若者うけ玉はり某御奉公の手柄はゆめにいん手よむせる馬鹿者を
かへして見せやさんといひて外のゐたに立いでやよく旅人いん身いつまで待る、どもわ
るも嘉門の歸宅のはど何の時といのれねば若日もくれなば難儀のうへの難儀ならんとく
へられよごくといひつ、手をとりてひきたてんとせしが顔を見て仰天し貴君の由理を
助勝基公のわらま此おん姿の何ゆゑぞと打蕪つ、恭禮を行ひ官領職のおん身を
以て一人の従者をも召具せられずかるよまき彦若体いぶのしさよと相のぶる勝基この
人を桂之助國知とい見つれども一言の答もあく唯拳を握り齒をかみ定めて實氣にうな

様子也桂之助こゝろづき某おん館(義政公をさしていふ)の御衆色を損じ濱名入道殿の御
意よよりて父の勸氣をうけし身あればおん詞をたまひらぬも理なりか、る大雪をいとし
いす自此家にいより玉ふを察し思ふお嘉門を軍帥よ召抱玉いん精掃と存するあり某今日
此山中わいより心を盡して嘉門お近なき候も別意おわらず會て御節嘉門が編さる武
然軍といふ書と御懇望ありといへどもおれよく秘して他見てゆるさず若殿命を以て召
らる、時いんの書と聽て身をかくさんこと必定ありとてこれまでそのおん沙汰もあらざ
き某個此事を思ひいだしなむとを嘉門に誠心を見せのの書を得ておん節またたまつりそれ
を御功あして父の勸氣敏免の御内意を願本らんばかりとなれば勝基は目もくけもの
身放件无悪よしておん館の御不興をうらふり父の勸氣をうける言ふべき詞あして
のたもふおを桂之助けお理どその身の程を後悔し此うへに嘉門御子よ勝基のど打わけ
ひて味方につけせめての功にあすべしと心のうち思ひつ、打まはれて内お入あつく若
母の前よひさまづく老母見るよりの馬鹿者いひまだかへらすや理いふてなせかへぬぞ
汝の家外なる不測候ものかかざばのりいひがひかくて此家よ足をどまり嘉門と師とたのみ

兵法の道をちをわきまへんこといかでそのかふべきぞおよそ奴僕を召仕ふよそののひめ
みよく戒されば不奉公せるものぞといひて一ツの服沙包をとりてさんぐよ打擲すといへ
ども桂之助露ばりも怒るいろなく某が宿願成就するまでいにかある憂目よあふども此
家をいづる心あわらずお氣よかなぬ事ありてことへ打殺さるゝどもせんすべなし此うへ
のお情ふかの雪中の侍よ嘉門どのをか引合せくたされ事の子細をふん聞玉かれかし
と簀の子のうへは額をつけ涙ながらねがふ形勢誠お哀の姿よて思ひ入てぞ見えたりける
かゝる折しも納戸のへだてをさとひらきて立出る骨柄白糸絨よ銀の紙織したる腹巻の上
小萌黄錦の陣羽織と着し青鈍の大口はき黄金作の丸鞘の太刀をとき文武曲の二星と書た
る軍扇を取て立出たる爲体志氣堂を威風凛々として誠お一個の英雄と見ゆたり桂之助仰天
し何人ぞと顧よ是乃別人あわらず梅津嘉門宗春なりこり曉を敷打拵といふのりける
よ嘉門門外に出勝基をいざなひいれて上座よする桂之助の手をとりてその次にをらしめ老
母もろともはるのふくだり平伏して恭しく禮をおこなひまづ勝基よむかひていひけるの某
がごとき不肖の身とがばかりは悲願望玉の事真加あまる仕合也頃日某が他行のほどふ間

といふ歌をしるせり桂之助眉をしいめて此手跡の見おぼえありといへば老母小膝をす
その爲家卿の詠歌よして夫木集に入る歌なるのそののみ祖父君佐々木盛貞公彦在京の
から妾が夫梅津兵衛北野の社人ふてありし時彦連歌のついでにおん筆をそめてさまはりし
短冊ありその短冊の箱を以て打擲仕りしすなはら祖父君のおん筆をくたされ君がこれ
までの彦不行跡を戒玉よ同然也まかるお君おん怒のけいひも見え玉のす妾の打擲とよ
へまのび玉よ爲体深く先非を悔玉ひ武道つれく草を得て彦勘氣おんわびの種とかし玉の
ん彦心底あらはれてかんとおしく胸さくるばかり悲きを見せやをまじと涙をかくせし老
が心を彦推量くだされのし子よりも孫ののほき世の人の心どかし平人のわん身ふらば
祖母よ孫よと名告あひ娘ののさみもいつくーみ片時も傍をはなすまじさよ君臣とへだされ
ばいひたきことのかすなきも心よ思ふのみぞのしどいひて悲歎よ抽をひしけり長ありて
涙をぬぐひいかよ嘉門此うへはあの秘書を惜まを君にさてまつれといふにぞ嘉門こゝろを
いとてあの書と取出して桂之助よ奥へけり老母又勝基よむらひ彦寛のどとく桂之助世の今
のひらしの志をたため玉ふさればおん節の彦前あるべうどりあしひとへは願奉る

といへば桂之助の秘書を勝基に渡し、稽首俯伏してともにこれを願ひけり。勝基打聞玉ひかねておん館に懇望の此秘書を奉るの國知きの大功あれば、彦前をよきみどりなしてやぐて、飯國とり持べとのたまへば三人ひとしく喜ぶこと限りか。扱嘉門勝基もむかひ先年彗星あらはれたる刻星のいろ蒼に黄をおびたるを見て、牝鶴晨して婦女權を奪ひ大亂の起るべききざりと考たる事を語りければ、勝基掌を打てその先見を感じ、義政公の北の臺香樹院殿の若君と濱名入道お相托して世にたてんと。今出川殿の勝基と執權として、武將たらんことをはゐられ天下二ツにわかれて已大亂の起るべき時節ある事をものがりければ、嘉門又先年濱名が招ぎよ應せずして、岩坂猪の八等數人を打とりさちよ此山おとをのくしたる事を、のりて互に權兵學の事を論じ、嘉門當山お任常に千早の城跡を見て、楠氏の奥妙を感じる事おどを物語けるの嘉門のさねていひけるのさりながら、官領職のおん身よて此山中は唯ひとり往來し玉ひ若濱名方の者ども聞知り多勢を以てとりかこまばい、玉ふやらん君子の危きにちりつゝあすといへり、軍慮のはどうけたまはり度いと詰問を勝基莞爾と打笑さる時、の備ことありといひつゝ、懷を探り號笛をとり出して吹立玉へ、忽、鎧腹巻も摺手、脇櫛を

きびしくかためて、簀笠をうち着たる荒武者どもこの木蔭のこの岩のげより、あられ出でて數十人、駈集り枚とふくませたる馬を引出して、彦飯館とよばれ、嘉門おどりあがりて、感謝しこれいよしへ、韓信ももちひたる虚無の謀計、伏兵からずして、其理すみやのありと、稱美の折しも、以前の手負熊いかりくるひ、此處へ走り來ると、荒武者どもかけへだて、手櫛をとりて、已につき殺さんとしつるを、勝基見玉ひやれ、まてまばしと聲のけて、とよめ玉ひ夫ハ櫛を考へる小女王太公望を得ざる時卜して、非熊といへり、我今已に當世の呂尚を得て、いあるま熊を欲せんや、無益の殺生好むべからずとくく放やれど、かふせければ、荒武者ども嘸とこたへて、放ちけり、勝基桂之助おむかひ和殿は、今まばし世としのひ、飯國の時節をまたれよかし、老母のしはらく、此家に、あれおさねてむかひの乗物を以てよびとるべし、嘉門の今そぐはともなひゆかん、幸ひ雪もふりやみぬとのさまひて、馬ひきよせて、乘玉へば、嘉門の馬の左よしふが、ひ大勢の荒武者ども列をたとして、前後をかこみつめる雲を、踏分つゝ、麓を、斥ていをもく、老母の嘉門がいさましき門出を見かくりて、そとろよ春ぶといへども、桂之助のみすばらしげある姿を見れば、胸ふさがり喜び、悲み打ませて、志をし詞もなかりける、桂之助にむかひよそかに、君よあ

のせまゐらざるかん方ありいざこなたへとて奥深くはかれたる一間のうちよいざなひけり
まれ何人にあひするやまら老のちくくの巻を讀得てしらん

○雍州志府曰梅津清景の塔梅津村あり清景の藤原惟隆十八世の孫也代々院の北面

たり禪法又飯一剃髮して是心と号す云々案るふ一説是球いづれは是なるをしらす
此考の卷之第四回の下に記すべきを誤てもらしぬれを此又記せり彼處とてら
し見るへし

夫のさておき爰に又名護屋山三郎元春の一ツに桂之助いてふの前月若等三人のゆくへを
たづねてその安否をどひ二ツあひ父の仇不破伴左衛門をたづねて宿意をどげばやと心の二
ツ身の一ツちよ心をつくだきつ、僕鹿藏を具して処々方々をたづねあるさしそらく旅中に
月目をおくりけるが一夜旅店のうちお不思議の夢を見たりその夢いうにとをれを頃しも蘭
盆の時よて父の亡霊をまつらばやと香華灯燭をもとめん爲街お出けるお民家一統に靈柩を
まうけ庭火をさきて亡霊を迎る念佛の聲念珠の音街よみちあまの亡者どもつぎひ来てお
のがさまくくのなごこなぬの家々に入る爲体誠に哀のありさまあり亡者のそがたさまく

みて額に波をさへたる翁もあれば腰よ弓を張たる姥もあり若男の幼子の手をひくもあ
り若女子の乳ぶさとなれぬ嬰子と懐あしふるもあり雨露よされたる骨のみつとき男ども
女ともわらちのねたるが影もひとさの薄見わた浪々踏々とほゆみ来るのいく年ふりし亡者
にや頬髭生いげりていとあらしくしき男のいまだ肉脱もせずなましく見ゆるのさのふ
けふの亡者あらん白髪を乱せる姥の亡者庭火のあげよはらばひたるおさあ子の顔をさしの
ぞき見てさめくどなくの孫よ心の残りつるか鼻ひらみ口ゆがみていと剛男の亡者むか
ひ火たく女をつれくどみてうらめしげよ立たるの後の夫をむらへたる恨どおぼしかくさ
まのの亡者蜂のごとくお群蟻のごとくに集来れども家くの男女の目よの少しも見へざ
る様子あれば山三郎のれも命おはりて亡者の數よ入けるのど一度のあをろき蜂蟻の一期
朝露の命泡末無常老少不定の世のならひ昔かくの如しと一度の歎きてたよみける所よ春
後の方よ山三郎くとよよ聲虫のなく昔に異からず山三郎身をひるがへしてこれを見れば
正しく亡父三郎左衛門あればうちおどろきつと平伏して剛をかり世を去玉ふ親人よ父あふ
事の不思議さよといへば三郎左衛門いひけるの故我仇をむくはんと身をくるしめ思ひて

すを昔の下よて不便に思ひこれまであたをあらはせしど汝伴左衛門をもどめんとならば
他どもどむるの無益也はやく京都又立越なんしが幼年の時いひあづけしつる女をたづねて
相まみへあばおのづから伴左衛門にめぐりあふへし此事を告ん爲あまうで來つるぞ親子の
一世のちぎりなれば再まみゆる事を得がうといひててさざらんとする袖ますのりせめて
今えばし待たまはれかしといふかとおもへば夢さめて旅店の寐所に只獨惘然として居たり
けるが五更の鐘おおどろきてやうく夢なることを曉し悲歎お袖をまぼりけりかくて山三
郎父の告にまかせいそぎ京都より立越て小幡の里にわやしげなる家をもとめ鹿藏もろども住
けるがひさしく旅中よりありて少々たぐひへも皆もちひ盡し素もなりとひあき身あれば持
合せたる衣服のたぐひもおほれたに賣盡して日々をつひへあかへかし至極貧しきくらしあ
れども鹿藏忠義の心ふのき者あれば毎日煎じ物を賣お出て身体の瘦はるともいとはずや
うくかそけき煙をぞ立ける

○案るよ煎じ物賣古事にや文明の頃の職人盡のうちに見ゆ又能狂言にせんじ物賣
といふあり藥を煎じてにるひ賣するものとぞ

馴たる女あれバゆるく物語し玉へといひて出ゆきぬあにて別に人もなければ萬城かの
侍にむかひ卒爾なりといへどもとひやし度事のはんべり妾の萬城とやそをびなるがめん
身三本傘の紋つけ玉ふからの若名古屋山三郎のにあらすやといふかの侍打聞てきて
聞およびたる萬城どのなるかおここの山三郎に何の縁縁ありてふづぬるや推量のことく某
の山三郎なりとて編笠をとれバ萬城顔をつれくぞ打まもり幼時わのれされども顔のまの
と見おぼえぬ姓名のおなじおん方なれどもおん身の妾がたづぬる人はいあらす腹心のだん
のおゆるしわれ妾の大和の國佐々木の家臣名古屋三郎左衛門の、子息山三郎のとてか
さなき時いひなづけの服なるゆゑたづねはんべるありとてやいなげよ見えければかの侍用
をまのめまかのささふおん身の和州守門の浪人高間久米右衛門との、息女にて幼名を若
橋といひはすやといへバ萬城おどろさいかにしておん身のさばかり妾が出身をよくしり玉
ふやといふかるにぞかの侍掌をはると打賊に不思議の出會あり今の何とかつ、みれば某
いおん身のたづね玉ふ佐々木の家臣名古屋三郎左衛門正春の、僕鹿藏とやそ者ありかれ
て山三郎の幼年の時いひなづけの女子ありしと聞しおん身をたづねありけるら某か、る打

扮よにて今日しも此曲中へ來たりしの大にいとれゆることなり先年主君三郎左衛門どの佐々木のおん家の執權不破道犬が兒子伴左衛門が爲に鬨打にあひ玉ひそのおん館の騒動によりて山三郎どの涙くくの身となり玉ひ敵伴左衛門がゆくへを尋んため所く方くをめぐり旅路に月日をおくり玉ひしが近頃當國小幡の里にのくれ住玉ひ某もその所仕へすすまかるに頃日人の噂を聞バ伴左衛門雲は稻妻の模様つけたる衣服を着して此曲中へ往來せるよしかれ敵どねらひる、身を以て人の見知りたる衣服を着てまのも人立むはき所を徘徊せるのこ、ろえずうたがふらくの假人あて山三郎どのをつり出してかへり打ますべき謀計と思ひしゆゑ某持傳へたる一腰を代なし主人の紋付人の見知りたる衣服をこしらへてかくたひれ男のさまに打扮山三郎どのと見せけふしも此處へ來りけるは折よくかの侍ふゆさあひわざと鞘當して喧嘩を仕かけこ、ろみつるにかれ始終ものいはず深編笠よて面をかど見えざれども身のこたらしき恰好果して伴左衛門はあらず小指の死を見れば伴左衛門が腹心の傍輩犬上雁八といふ者に疑なしとかされば葛城の涙をながし山三郎どのの妾七才の時おやおやのゆるしをうけていひなづけしつる夫なればうさ川竹の身となりても片時も忘る、

○刀槍の稻妻

扱山三郎の専かれらを打べきびんきをまらけるに一日鹿瀧かの地よりあひまじく飯來りて葛城が書をさし出しければ山三郎のそがひしくこれを讀に今夜伴左衛門等五人の者一等に茨木がもどに來るよし聞出しぬ朝の未明にかへるよし聞ぬれば堤にのへりを待うけて討取玉へかならず此時を過し玉ふべからずとことまじのにまゐるしたり山三郎これと讀かひり天地を拜しおどと極がりて喜びけるが鹿瀧もいさみたち何ぞぞ主君の敵なれば助太刀をれんゆるしくだされかしとねがへばもつどもある望なれども敵大對なるに聽して助太刀をもちひしなんと世の人口にの、らんも口をしければ泣をともないん事かあふべからずといへば鹿瀧涙をながしまかるうへのせめてかの所まで供をゆるし玉ひれかしおん息つきの水にてもまゐらせ度いといへばその勝手次第なるべしといふにぞ鹿瀧喜ひ食事を期してそゝめあせし何くれと支度して時刻のいたるをまつ山三郎の又さど曲中に満ふたのれ男の休に打扮父のたみの左文字の刀をおびその夜三更の頃より五條坂の葛城にいたり臘月夜に幸に鹿瀧もろとも妻島のうちには身をわくして時をいふると待にけり此時の是れづれの時ぞ

や寛正五年三月下旬とかや折しも春雨の晴間にて道わしけれども常から往來まげり提なれ
バまばらくも人たえずおくりむらひの提灯星のごとくにづらなり駕籠はしらせるかけ聲の
飯籠の音かとわやまたるさて夜のふくるにまたがひて人のゆき、も漸々またえ辻行灯のと
もし火もあすかかて昨めせく、按摩とらせ玉のすやとよばふ聲も已にたへ小田の蛙の聲の
みたかくきこえて寺の鐘五更の時を告たり月日は山の端よあちの、りければすい時刻
いたるりと山三郎目訂をえめし鑄元をくつろげまくり手して待けるおやせなくかの雲に稍
妻の衣裳を着たる侍一人編笠の下に覆面して板金剛を踏ならしつ、おゆと来るまらまうけ
たる山三郎提のうへに飛のぼりめづらしや不破件左衛門のくみふの名古屋山三郎なり父の
敵覺悟せよとよば、りつ、氷を刀を抜はなせバかの侍高くとあざみ笑て編笠をぬき
そて此方よりたづねもどむる山三郎こ、であひし天の興へかへり打なるぞ觀念せよとい
ひて被合せ二太刀三太刀戦けるが山三郎のするさき太刀をうけ損じ左り袈裟に斬さげられ
て地上に撲地たふれたり山三郎鹿藏をかへりみて彼奴が面をよく見せよといふにぞ鹿藏立
より、つかまえてひさかこし月かけにそかしみて此者の十子沈助にていといふ山三郎う

なづく間もなく又おなじごとくに打拵たる侍一人のさばりかへりてゆゆを来る山三郎むか
ふに立ふさがり汝之不破件左衛門なるべしこれは山三郎父の仇を報也といひつ、まりつく
れば此侍も笠とりそて、刀を抜うけつながらしつ七八合戦けるが泥にすべりてよろめく所と
山三郎飛か、りて胴ぎりに陸離せんと斬はなし腮を以て下知すれば老か藏いそかはしく走
りより月の光りに面を見て此者は犬上八にていといふやせなくおるじ打拵の侍一人を、
と来る山三郎ちかちのど立ひのいかに件左衛門これは山三郎なるぞ父を打れし恨の刀思
ひしれといひつ、斬つくれば編笠をかなぐりすて刀を抜てきりむすび丁、しと、た、かひ
けるが運の盡にや堤の端に足をふみながしうつふしまふる、所を山三郎一層さげびて斬
けるがたちまち首堤の下にまろびかちぬ鹿藏つ、きてとびくだりかの首をさりあげ見て此
首は片耳あければ藻屑の三平に疑るくはと山三郎そのものもまた件左衛門にてはありし
のとやいなげにいひつ、刀の血しほをぬぐひ一息つくいとまもなく又來か、る侍もあなほ
如くの打拵あり舟材恰好此度は止しく件左衛門と思ひつ、前のなとくに名告のくれはかの
侍こ、ろえさりとはいひあがら刀の柄に手をかくる所を山三郎おどりあ、りて腰車と斬ける

が直じふたふれもせず二三十歩ほあゆみゆく鹿藏しかぞうはの者もの逃去にげゆくどこ、ろえてあとをひいてゆ
きけるにかの者もの前まへあきらられし者の死骸しかがいにつまづき二つみなりてぞさふれける山三郎さんざうが刀かたは
父ちちのかさとの左文字さまじの名作斬めいさくざんては劍法けんぽう手練てれんの早業はやわざかくあるもことほりと鹿藏しかぞう心に感かんじける
が山三郎さんざう心こころせき伴左衛門ばんざゑもんのいかみくどとへば鹿藏しかぞう屍しかばねをほらためて此者このものは笹野ささの蟹藏かにぞうよて
いといへば山三郎さんざういひけるとその者はまさしく伴左衛門ばんざゑもんと思おもひしみそれも又またかれにてはな
かりしか四人よにんの者ものども伴左衛門ばんざゑもんをたそけて父ちちを打うちたる仇人あいつなりといへども本人ほんにんを打うたざる
うちは安堵あんぶならずつゞきて来くべきとづなるにといふありつゝ、まばらく待まつといへども人影ひかげも
見みへざれば胸むねいどさはさ此所このところ一方口いつはぐちあれば外ほかにかへるべき道みちもなきにこのこ、ろえぬ事ことあ
らすや我われと出口でぐちまでゆつて見みべければ汝なんぢはこ、にありて心こころをつげよといひ捨て出口でぐちの方かたへ
はしりゆく時にむかふの方かたより一乗いせりやうの駕籠かごをか、げて馳はせ来きたりけるが駕籠かごのさきども山三郎さんざうが
刀かたの光ひかりのきらめくを見て仰天やうてんと駕籠かごを地上ちやうじやうお打捨うちすてて飛とぶがごとくに逃去にげゆくぬ山三郎さんざう駕籠かごのうち
うたがいにしく思おもひつゝ、刀かたのさつささよて垂たれをあげてうちを見れば雲くもに稻妻いなづまの衣裳いせやう着きたる
待藏まちざう笠がさをさぐる儘ままにて駕籠かごのうちありければ心に喜よろこひいかに伴左衛門ばんざゑもん我われは是これ山三郎さんざうなり

汝なんぢを打うちて亡父むつちちの宿恨しゆくこんをはらさんとこれまで心を盡つくせしかひありて今日こんにち只今ただいま出會いする事こと
龜首かめくびの浮木うきぎにあひ優曇うゑん曇たむの花咲時はなさきときを得えたるに異ことならずとくく出いでて勝負しやうぶを決けつせよとよバ、
とバ伴左衛門ばんざゑもん一言いちごんをこたへす向むかうろたへけん刀かたも拔ぬき駕籠かごの内うちよりよろめき出いでて山三郎さんざうが
胸むねぐらよどりつきけるにぞ山三郎さんざう刀かたをあけて腕うでをさりはなせバ手首てくびの胸むねに残のこり呀あと一聲ひとこゑさ
げびてたふる、所ところを首くびらうに打落うちおしをがいにしく首くびをととりあぐる折をりしも曲中まがらみの方に人聲ひびこお
びたゞしくさこへけれバ若首わかしゅを奪うばてのゝあふまじと手てはやく籠笠かごがさを包つつかてたづさふる間まもあ
らせす曲中まがらみの者ものども提灯ちやうちんをともしつれ手にく棒ぼうをおつどりて大勢おほせ四方しやうほうをどりのこと狼籍ろうしやく
者ものを打うちたふしてとやく繩なはをかけよといしめきぬ山三郎さんざう聲こゑ高くこれハ狼籍ろうしやく者にほらす大和おほわの
國くに佐々木判官ささきはんぐわんの家臣かしん名古屋山三郎なふるやさんざう元春もとはるといふ者もの父ちちの仇あだを打うちたるなりかならずあやしむべか
らずといへども曲中まがらみの者ものどもまらぬいふ此場このばをのがれん爲ためのいつはりならんといひて聞入きこす
已すでに大勢おほせ棒ぼうを打うちふりて敵てきたのんとしふる所に鹿藏しかぞう大勢おほせをぬしめて山三郎さんざうが前まへにちかづき
相公さうこうの大事おほいじのおん身みあられバかれ等にかまひ玉たまはずとくくおんあへりいへかしほどハ某たれが
よきにどりとからひぬべしとて大勢おほせにむかひ汝等なんぢらうらがいしく思おもふもことわりあられバ某人たれ

眞となりてこゝよとゞまるべし此かん方を正道をひらきてとほしうせしといふに世曲
の者どもやうく得心してかこみをひらきければ山三郎夜の明けそてぬ間にといそぎて
幡にかへりけり扱も山三郎の年來の宿志をどげいさす、みて小幡の里にがへりけるが
時己あ夜の明けぬてぬさて伴左衛門が首を父の位牌に手向ばやと思ひ汝ゆゑまいく年月
なき苦勞せしことよといひつゝ、編笠のうちより首を取出して見ればこゝいかに伴左衛門
のあらずして葛城が首なればこゝい夢か現かどいひて只あされざるばかりなりさきに大
にとりかこまれ心せし火急の時あれば心つゝのざりしがゑりに殘しし手首を見れば何
かわらんにぎりそへたるものあり手くびをもぎはなして見れば一通の書をおきりてぞ居
りけるいそがしくひらき見れば是すなわちのさかき文ありその文にいはいはく妾こと此
不思議に殿にめぐりあひおん父の仇ある伴左衛門等を手引してうたせやさんどうけがひ
るに前の日伴左衛門妾かもとに來りてやさるゝ、い今までのいゑらざりしが頃日偶きけり汝
和州子守町の浪人高間衆右衛門が娘幼名を岩橋といひつる者のよしとさあるやい
くそれたがらずに正しく我別腹の妹めて妾腹なり其妾ゆゑありて懐胎のうちに衆右

門がもと嫁しゆさかの方にて汝を産つるよしかねて父道犬の物語にてき、ぬ其のちひ、
ぬておどづれも聞ざりしが此くるに身を賣しとい夢おたもえらざりき此儘おさてり父の
恥我耻なれば父あ此事を告て金子を調じとにわがなひ出いつかひせしどてかへられ己
に昨夜そくづくの金子を以て我身をわがなひ玉りぬ伴左衛門のやさるゝ、所いちく我身
におぼえ移まば別腹の兄なることうたがひなしさて伴左衛門密にやさるゝ、いこのをろ名右
屋山三郎といふ者をりく汝がもとに通ひ來るよしかれおれ深く遺恨あれ汝手引して
打せくれよどのたのみなりこれを聞て胸ふさがり兄のたのきをうけがへば大を殺し大罪な
りかん身につきて兄を打するも父大罪なりかたき同士に縁つなかりしいいかなる宿世の因
果ぞと我身ひとつのかあしさを推量くだされかしども生ながらへがたき身のうへへ覺
悟をきいめかん身のもとへい今宵伴左衛門等を打玉へと通じおき伴左衛門どのの四人の
者と共あかへらんとすすを用ひてとて別坐敷あどマめおき家内の者にい伴左衛門を深く
酔たるよしを告て妾が閨房まで駕籠をかき入させ妾伴左衛門どの、妾に打扮て駕籠に乗
しわれん身の手にかゝり死ん爲ぞか望みの如くかん手にかゝりはんべるなら伴左衛門

を打いどおぼされてかねての恨をばらし玉ひ何ぞぞ兄の命をおんたそけくだされかしこれのみ今生の願なり敵の妹と聞玉ハマさぞ後備し玉ハんがせめて来世の夫婦とおぼされてをりく一逼のは回向ぬかひとべるぞのし伴左衛門どの已に妾か身の代をつくのひたれば妾死そどもあるト道順の損せならすおん身手にあけ玉もども原いひなづけの妻なれば科となるべき事なしかきのこ一度ことおやかれども什損せまじと胸どマろさて筆もふ、中涙に墨も散とべればくさくさ中残しひとこそやのに記しつけておくのかたに○壁に生るいつまで草のいつまでもつきぬ恨を思ひ斬りてよ」といふ辭世の歌をかきつけぬ山三郎讀みわたりて十分におどろきえなし思案にくれたりけるが哀傷りて葛城が首とどりわけてつらく見まの鉄漿をおどして白齒となりみどりの髪とさりたちて笑るかごとき顔なり山三郎落涙して思へらく昔袈裟ひ前髪をさり夫の身にかかりて遠藤武者盛遠に殺しし母と夫の命をすくいん爲あり此葛城の兄の命をたそけん爲に身代とありて我身よゝりさる心庭袈裟御前にもをさくおどるべのらずその志い不便ありといへども晋の豫讓が衣を刺たるふめしとい事かればわれがねがひのごとく伴左衛門をさすけおきて我孝の道たちがたしさりながら

伴左衛門昨夜の事をき、遠國に逃走らんハ必定也畢竟我心せさる儘に名告かけて返答もまたす打ちやまりしハ一生の疎忽あり父の仇をむくふべき者の所爲にちらず世の人にあらんれんことこのくちをしさよ父の靈魂夢中に告王ひし時いひあづけの女のうたさの妹といふことを告ぐださるべき理なるに左もなかりしハよくくまぬかれがさき悪縁ならん先年生駒山の籠にて奥方をうば、れし時死ねばをらぬ一命をこそまでいきながらへしも主主人がたのおんゆくへをさづね父の仇をむくハん爲ばかりなるに今におゐておく方の存亡もさだめならず父の仇も打得ざる事不忠とやハはん不孝とやハはん我身ながら愛想盡ぬとても武運に盡たる身なれば腹かささはさて冥途ふいたりせめて親人に分説せんと心を決し血刀をとりなやしてやせく腹につきたてんとまたる折しも外のかさよりやせはやまるなまばしくど聲のけて入来る人を見るに是別人あならず則是梅津嘉門景春なりあどはまがひしの鹿瀬が弟猿二郎よぞ取りける山三郎あまりに思ひかけさればいふかりつ、ひとまづ刀を鞘あさめていでむかへば嘉門上座に打通りていそく猿二郎が案内にて此かくれ家へまかり越しハ別事にあらず某まばらく河内の國金剛山に世を遺仕官の望をふつといへきも

す一個の悪人を捕へて佐々木の館の騒動の根本の執權不被道犬が逆心より出て繼母御手の
方ふ悪意を薦て實子花形丸を家督としのちくい母子ともうしなみておのれ家をうらびと
り濱名入道に味方せんたくとなる事あきらけし不日に某勝基公の名代としてかの館に立越
道犬を乱明して悪意をわらいしよた、ひ桂之助どのを世お出しやさばやと思ふなりと心底
のこらずのこりけれバ山三郎三拜してぞ喜ひける嘉門已に立わかり忍の他行あればひせと
りのたしかさねてゆるくまをゆべしといひつゝ門口に出てまいぶきすれば逢あふとにひ
かへたる供さいり恐乗物をかき来る山三郎門おくりして肥を行へば嘉門會釋して乗物に乗
うつり別を告て出ゆきぬのくて山三郎の嘉門が敷海によりてやうく心ひらけ葛城が首を
とり手水盤の水をくみとり血し目を洗ひなくく首を佛壇おすゑて香をさき水を手向鉦打
あらしめて南无幽霊頼尊佛泉菩提南无阿彌陀佛もみだ佛と唱て居たりけるお思がけさる床の
下より明晃々たる劍のさつさき危く膝割を整てぞ閃き出ぬ山三郎屹と見て手ばやく手向の
水を取て劍にそぎ刀をとり身をそバめて観ひ居るゑ床の下にの仕すましうりどや思ひ
けん板敷をわりくと押破て躍出たるい何人ぞや是則別人にわらず不被伴左衛門重勝なり

伴左衛門聲たかく斯有んと思ひしゆゑ今朝いまた聞と幸ひ汝が後をつけ來りて床の下
隠れ始終のことを委く聞ぬ尊履打の宿恨といひ妹の仇かへり打なるぞ觀念せよと言つゝ斯
つくれバ山三郎刀を抜て丁と請とめ已と來りて灯火入飛入夏の虫これ天の賜ものなりと呼
いりて十余合戦けるが伴左衛門運命尽たる時おや有ん養の子に星を踏ぬきてよろめく所
を山三郎はやく足と飛せて合破と踢たふし乗かゝとて刀を取なやし首と佛とかき斬たるい
心地よくぞ見えたりける斯る折しも猿二部廊の事をいまして慈なく鹿嶋を伴ひて立かへり
此体を見て兩人どもに天を拜し地を叩して喜びなさに泣けるいけにたのもしき者共なり

○積善の餘慶

扱も大和國佐々木の館にの家督さだめの事につき官領由利之助勝基公の名代として梅津嘉
門景春今日着賀のよしささだちて沙汰わりけれバ判官貞國をづから下知して廣生殿と都敷
させ禮服と着して相待けるに程なく來駕を聞えしかバ自ら支那に出て相むかふ梅津嘉門金
紋紗の道服に白轉好の長袴を東海老靴巻をひ中敷の扇を北城錦傘々として入來り張内に
つきて廣生殿にうち通り敷の席に居なすとけれバ判官悲しく顔をおこなひ長崎の所御習

勢のいたりには相のふれの梅津嘉門景春一回の挨拶あり此度官館の名代として某まかり越たるの別儀あらず先だちて次男若丸家督の願を出されつるが甘儀につきかみ疑の筋ありて某ふゆき向ひ糺明せよとの嚴命なり先内室蜘蛛の方花形丸執權不道犬をこれへよび出されよといふおぞ貞國かしてこいとてかくと言つがせければやせなく蜘蛛の方禮服をつけ花形丸もろどもに出来りくるかに下りて禮をなす不破道犬も禮服にて椽がいお平伏すれば梅津景春さつ貞國にいひけるの先だちて子息桂之助在京の刻放佚无愁の不行跡かみ館(義政公をさす)のかみ聞又達し官領預名入道を以て内命あつて已に勘當の身となましが今に到きてふかく先非を悔かみ館に對し奉り一功をたてたるにより勘當をゆるし家を讓きてかみ身の隠居あるべしとの内命あり桂之助勘當許死の上にてふの前月若をも共にゆるして呼迎へしべしと相のふれば貞國いまだ答もせざるに道犬いざり出おそれ多くいへせもいてふの前月若の現存母の蜘蛛を呪咀したる罪人にいへばたとへ桂之助のかみ断しあるともかの母子兩人をかみゆるしありての御政道たちがたくいん殊更かれら兩人ゆくへをやすすといふ言ければ蜘蛛の方いにもさほりおれら兩人妾と花形丸を呪咀したる事かみ館

職にいまだあろしめざるあらん貞國どのくしくさこへあげいへどのたやに笑ていひければ景春居だけだのになりて兩人とたとにらみ世俗の常言あ盗人猛々しいふの正に汝等が事ならん道犬蜘蛛お惡意をぞめ花形丸の代にあさんと兩人とかりて月若を呪咀しそのうへ奸計を以ていてふの前月若を罪におとし貞國どの、命といつり月若の首を打せんとしいてふの前を岩倉谷に引出して首打んとせしこと皆汝等が仕業ならずや桂之助放掃の根本も汝兒子伴左衛門にいひつけてす、めたるにうたがひなしたし分説ありやといへば腹ふとき道犬少しもひるまざるから笑し當時官領職の軍師と尊敬せられ玉ふ景春公のかみ詞どもおぼえはべらずいてふの前母子蜘蛛の方を呪咀したるにの自筆の願書としかなる證據あり某等が奸計とやすにの何等の證據ありやおそれながらうけるまいり度いといひければ蜘蛛の方もその尾につか妾か惡意など、の思ひぬ着衣さる事よとつふやきてを居りける時に景春つとたちて椽さきよ出先刻すしつけおきたる體つさどくくこれへ引いたせとよば、りければ庭するま梅津が徒者大勢ひかへたる背後より名古屋山三郎禮服を着一修驗者頼豪院を高手小手にく、りわけ鹿嶋猪二郎兩人は繩をとらせて庭上よりひらすへふり

びぬ扱又浮世又平の百璧の巻物を一覽して書道の奥妙をさしめ師匠戸佐正見の勘氣をゆる
され戸佐又平重起と名告梅津嘉門の吹響より義政公の繪所となり妹於菴の曾て兄お學び
て自然と書道の妙をさしめられたれば世におまう繪と稱してその名高きこへぬ佐々真山八郎
の抜群の忠臣なれば桂之助おもく祿をたへんとおぼされけるが今の桑門の身なればとて
祿を受ざれば詮術なく數白金をたへけるに身も感ぜざるたまものなりとて再三辭しけれ
ども強て給ひしければその金を以て長谷部雲六が妹八重垣をたがみ出して家に養ふさぬ
これいその誠心を感じての事とぞさて山三郎の萬城が志をわかれみ神林がもとに金あまたた
くして追福をいとなませ一件妻をめどらじとちかひけるよし山八郎打聞てのちなさく不孝
の第一なりとぞ、めかの八重垣をおくして妾となさしむやせなく男子をまうけ後よこれを
名古屋小山三と稱し此小山三出雲の神子阿國といふ舞姫を妻として歌舞妓躍狂言といふ
事を始たるゆるよし後編に詳なり發兌の時を待得て見るべし不破名隠屋の文字に自然
不破名隠屋と云訓あるも此釋史におきていみじき吉兆ならずや

世話稻妻表紙卷之五下冊終 大尾



